

# 精神活動に関する比喩と慣用表現の生成・展開に関する研究

博士前期課程二年 047103 加川博子

( )

## 凡例

1. 文中の表の通番は章ごとに与えた。漱石による「意識の図」は再度提示するため「表0」とする。
2. 「青空文庫」及び「Project Gutenberg」収載の文学小説は、そのまま記載し、原文との字体の一致について言及しない。
3. 夏目漱石著『文学論』は一部旧字を変換して引用する。

## 目次

目次	… 1
序章	… 3
第一節 研究の目的	… 3
第二節 研究の方法	… 4
第三節 日本語における「意識」について	… 7
第四節 先行研究	… 12
第一章 ステージとしての意識	… 14
第一節 意識の上	… 17
第一項 自覚	… 17
第二項 記憶	… 19
1. 映像	… 19
2. 過去の記憶・新たな記憶	… 21
第二節 意識の下・意識下	… 23
第一項 職業意識	… 23
第二項 無意識	… 24
第三節 意識外	… 25
第四節 意識に上る事象	… 27
第一項 自覚	… 27
第二項 思考	… 28
第二章 球体、山としての意識	… 33
第一節 球体としてのプロトタイプ	… 33
第一項 意識の奥・意識の軽重	… 33
第二項 意識の表面・底 —感情—	… 35
第三項 意識に浮かぶ事象 —記憶—	… 38
第四項 意識の中・上	… 41
第二節 山としてのプロトタイプ	… 43
第一項 意識の高低	… 45
1. 自覚	… 45
2. 関心	… 46

第三章	日本語の心情表現を基礎に用いられる外来語	… 4 8
第一節	「テンション」英語における用法との相違	… 4 8
第二節	テンションと上下の関係	… 5 1
第三節	共感覚の視点から	… 5 3
第四節	テンションの価値付け	… 5 4
結 章		… 5 8
参考文献		… 7 2
資料編		… 7 5

## 序 章

### 第一節 研究の目的

日本語の感情に関わる慣用的表現には、「上機嫌」「思い上がる」「付け上がる」「格が上がる/下がる」「男を上げる/下げる」「お高くとまる」「鼻が高い」「目が高い」「頭が高い/低い」「腰が高い/低い」など、感情または性質・気質の相対的關係や変化を「上下」「高低」といった物理的位置の概念で表す例がみられる。この比喩的用法は外来語を用いた場合にも表れるが、しかし本来の英語には、以下の例のように物理的位置の概念が用いられないケースがある。

#### 【日本語】

テンションが上がる・下がる/上げる・下げる  
高い・低い

プライドが高い・低い

#### 【英語】

tention=緊張・緊迫状態  
(high tension も可だが気分の概念に対しては用いられない)

プライドが高い=too proud

テンションという語においては、日本語では「テンション」を「気分」の概念として捉え「テンションが上がる/下がる」といったように、上下の概念と共に表すが、英語本来の意味としては「tension」は「緊張」や「緊迫状態」を表し、緊張と弛緩の概念で捉えられる。「tension is high」と表現する場合もあるが、それは「緊迫状態の高まり(張り詰めた状態)」という意味として用いられ、「気分の浮き沈み」を表す要素はない。「また「プライドが高い」という表現については、本来英語では「proud」という一語でその意味を表現できるので高低という概念をもって表す必要性がない可能性が考えられる。もしくは英語における pride という語自体が「自慢する」という意味を含むため、「低い」という概念と結びつかないのではないかという仮説も立てられる。

これらの外来語が日本語の中に根付き始めた時、例えばテンションであれば「張る」から「上がる」へとといったようにその概念が日本語の使用意識に基づくものへとすり替えられていることが窺える。この事実より、抽象的な心情表現に「高低」「上下」などの物理的概念による位置づけを行うことにより、より具体性を持つ表現へ近づけようとする日本語の特質を垣間見ることができる。

本研究の目的として、まず

- ① 日本語の心情表現において用いられる「高低」「上下」などの概念は空間上どのように位置づけられているか、またどのような形として捉えられているかということについて明らかにすること。
- ② 日本語における「心情」＋「物理的概念」の組み合わせに規則性を見出す。また意味論上の区別としてそれらを系統別に整理する。
- ③ 日本語に受容された英語が日本語の心情表現として用いられる際に「高低」や「上下」の概念と共に表される必要があった背景、またはその必然性を明らかにする。

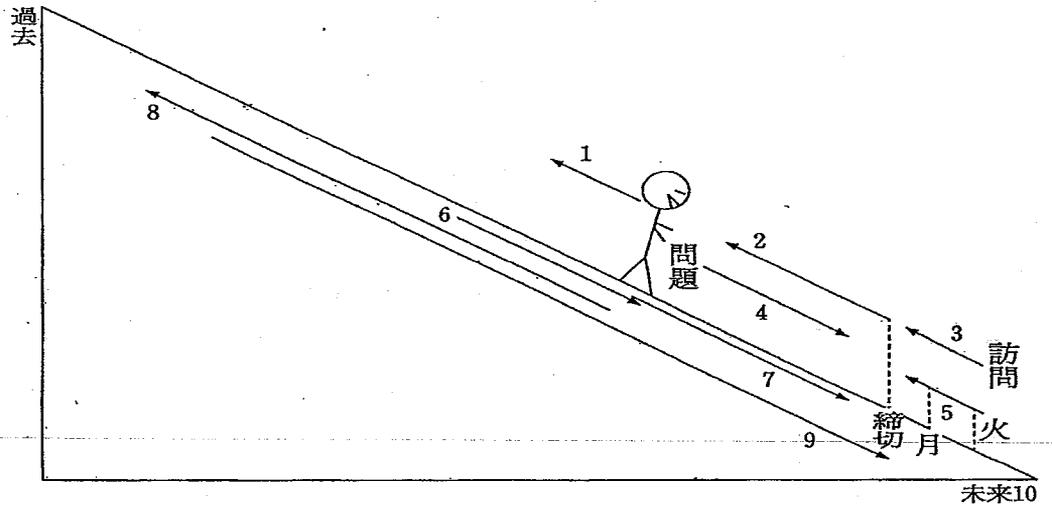
以上のことを踏まえた上で、最終的にそこから日本語における「感情」の表現に観察される精神活動のあり方と意識を明らかにすることを目指す。

## 第二節 研究の方法

上に述べたような外来語を用いた心情表現について述べる前に、まず日本語において「上下」「高低」などの概念と共に用いられる例について触れ、心情が空間上でどのように形作られており、どの場所に位置づけられるかによってどういった意味を有するようになるかということについて系統立てていく。

第一段階として、心情表現に関する用例を収集する過程とし、『分類語彙表』<sup>i</sup>掲載の、「高低」「上下」「浮沈」などの概念を用いて表される「自尊心」「緊張感」「集中力」などの語彙を挙げ、それらを元に「青空文庫」<sup>ii</sup>より文学作品の中から実際に使用されている用例を検索した。そのうち「意識」を含む用例としては、「意識が高い／低い」を初め834の用例が存在したが、「意識」という心情を表現するに際して、「高低」「上下」などの物理的概念とのつながりが多く見られ、その文脈により「意識」が表す意味にも違いが見られる。「意識」に続く物理的概念の多様性、例えば「意識に上る」「意識の上」「意識外」など、様々な位置関係を比較できるという利点、また心情表現に関わるため作者の個人的な感覚による造語的表現や、抽象的な例文も多くみられるが、「青空文庫」という枠組みを利用することで、作者、作品の選出を客観的にできること、更には用例数の多さより偏りなく調査できる用例とし、本稿では日本語における心情表現として「意識」という語に焦点を当て、この言葉が言語上どのような位置関係で表されるかという点について明らかにしていく。研究方法の一例として、辻 (2003)「メタファーによる抽象的概念の構築」<sup>iii</sup>を参考に、目に見えない「時」というものが言語上どのように捉えられるかという図を挙げる。

空間から時間へのメタファー



- (10) a. 過去を  てもしようがない。  
 b. 締め切りが  て  。  
 c. 訪問の予定を繰り返  る。  
 d. 問題を  送りする。  
 e. 月曜日は火曜日の  だ。  
 f. これまで一生懸命がんばって  た。  
 g. これからも一生懸命がんばって  ます。  
 h. 時代を  。  
 i. 時代は  って明治元年。  
 j. この事業の  が心配だ。

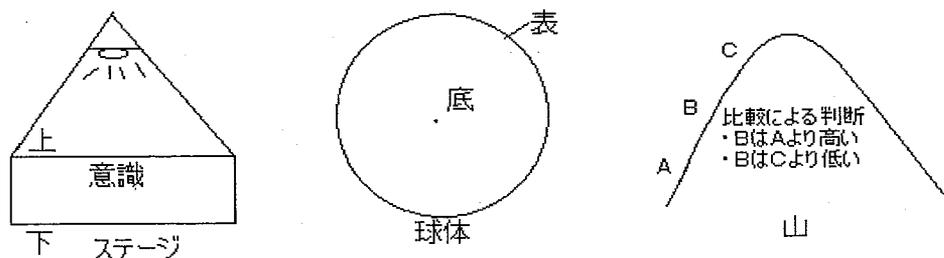
- (11) a. 過去を 振り返 てもしょうがない。  
 b. 締め切りが 近づい/迫 ってきた。  
 c. 訪問の予定を繰り返 上げ る。  
 d. 問題を 先 送りする。  
 e. 月曜日は火曜日の 前 だ。  
 f. これまで一生懸命がんばって きた。  
 g. これからも一生懸命がんばって いきます。  
 h. 時代を さかのぼ る。  
 i. 時代は くだ って明治元年。  
 j. この事業の 先行き/行く末 が心配だ。

正体のわからないものを取りあえずわかったことにしたい、というときの1つの方法として、そのよくわからないもの（典型的には抽象的なもの）を、よくわかっていると信じられているもの（典型的には具体的なもの）に見立てるというやり方がある。それは、既知のものに適用される語彙をそのまま未知のものに適用するということである。それによって、未知だったものを取りあえずわかったことにできる。これが認知言語学で考えるメタファー（Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1990, 1993; 佐藤 1992a, 1992b）である。(11)においては、「時間は空間である」というかたちで、時間というつかみどころのない未知のものに対して、空間という具体的な経験を通じて直接に知ることができるものについての知識を転写しているわけである。

氏の論を元に述べると、時間と同様目に見えない抽象的な概念である「心情」も「上下」「高低」の空間に当てはめることで、具体性を持たせることが可能となり、結果よりわかりやすい状態のものとして捉えられるようになる。日本語の中で行われるこの空間上の位置付けのパターンを観察することにより、不透明である心情表現における空間認知の方法を明らかにしたい。また、日本語話者が空間の認知能力を言語に適用する場合、たとえ英語を受容し用いた場合にもその名残は現れる。本稿のもっとも大きなテーマの一つとして話者が意識せずして使用しているこの認知能力というものを具体的な形として明らかにすることを目標とする。

第一章、第二章では、「意識」とその後続く「上下」「高低」などの物理的概念を考察していくうちに浮かび上がってきた、「意識」の形というものをプロトタイプ別に表示している。結論から述べると、意識とは次の三つに分類される。

表1 「ステージのプロトタイプ」 表2 「球体のプロトタイプ」 表3 「山のプロトタイプ」



- ① 「意識」というステージを基準とし、ステージ上でスポットライトの当る部分を照射範囲とし、明暗の対比を強調する。
- ② 「意識」を地球のような球体として捉え、もっとも深い中心部を底、外枠を表として捉える。意識を総括的に捉える場合に用いられる。
- ③ 「意識」を山のようなものとして捉え、相対的に「高低」の位置関係を作り出す。

本文では「上下」「高低」などが表す位置関係を明らかにするため、また抽象的な心情表現というものに具体性を持たせ、論を明確にしていくため、上のような図を加えながら説明していく。これらを順を追って整理した後に、第三章において日本語に受容された英語「テンション」が「高低」などの概念と共に用いられることについて、英語における用法との比較、外来語受容の観点からの考察なども含め、その背景について述べていく。

### 第三節 日本語における「意識」について

「意識」について「青空文庫」上で検索したうちその9割を占めるのが、「気を失う」といった意味で用いられる用例であったが、本稿ではそのような身体的な反応は疎外し、動作主が覚醒している状態で起こる「意識」に関わる精神活動を取り扱っていく。(全83例)

『日本国語大辞典』<sup>iv)</sup>によると、「意識」という語は一般に次のように定義されている。

#### 意識

- ① 仏語。六識、八識の一つ。眼、耳、鼻、舌、身の五識が五根を通してそれぞれとらえる色、声、香、味、触の五境を含む一切のもの（一切法）を対象（法境）として、それを認識、推理、追想する心の働き。
- ② 目ざめているときの心の状態。狭義には、自分や自分の体験していることやまわりのことなどに気付いている心の状態。
- ③ （－する）何事かを気にとめること。
  - Ⓐ 心に悟ること。わかること。また考えること。
  - Ⓑ ある意図をもってすること。
  - Ⓒ 自分やまわりのようすがどうなっているか気づくこと。
  - Ⓓ 特別にある人や物事を気にかけること。「異性を意識する」「勝ちを意識してかたくなる」

- ④ある物事に対してもっている見解、感情、思想など、社会的、歴史的な影響を受けて形づくられる心の内容。多く、内容を示す連体修飾句がついて用いられる。→意識が高い（低い）「社会の一員としての意識が足りない」

#### 意識が高い

ある状況・問題のありようなどを自らはっきり知っているさま。また、分別や判断の能力がすぐれているさま。←→意識が低い。

#### 意識に上げる

自分やまわりの状況などについて、自分の心にはっきりわからせる。自覚させる。

#### 意識に上る

自分やまわりの状況などについて、今まで気づいていなかった物事がはっきり知覚される。

#### いしきの関（しきい・しきみ・いき）

刺激によって感覚や反応が起こる境界。無意識から意識へ、また、意識から無意識へと移るさかいめ。識関（しきいき）。

上の定義を見ると、「意識」とは心または頭で考えられるものであり、自身の内部で起こる感情も含め、他人との接触または社会における自身を客観的にみることによって起こる感情や思想を指すと考えられる。しかしこれらの定義では、例えば②と③のハなど、意味が重複している部分もあり、これを基に明確に用例を区別することは難しいと思われる。また、「意識」という語は文脈によってその意味を変化させ、またそれにより「上下」「高低」の概念も変わってくる。

以下は「意識」に関する用例を文脈を基に意味上で分類したものである。それぞれ「自覚」「自覚のない状態」「記憶」「関心」「気持ち（感情を伴うもの）」「頭の中・考え（機械的な働き）」に分けられる。

自覚・・・自ら認識している事柄、確信している事柄

自覚のない状態・・・無意識、気にとめていない

記憶・・・自発的に思い出せる過去、何かをきっかけに思い出す記憶、これから新たに記憶されること、映像

関心・・・ある事象に対し、関心が向く、または自然に関心が高まる様子  
気持ち・・・感動、情緒、哀愁、温情など情に関わる心の働き  
考え・・・疑問、映像、規則、理論など機械的に働く思考

本稿では、「意識」というものを単に形として表すだけではなく、意味論の見地から用例を見ることによって、「意識」と「上下」「高低」の概念がどのように組み分けされるかということについて明らかにすることを目指す。「意識」+「高低」「上下」の概念が結びつけられて表現される理由について述べていく上で、まず「意識」という語がどのような意味を持ち、どのように定義づけられるかという点について明らかにしていく。

近代の文学作品を取り扱うにあたっては、明治、大正当時の文学者がこの語をどのように認識して用いていたかということに言及する必要がある。『漱石文学全注釈8』<sup>1)</sup>には、漱石文学の注釈として意識/半意識について詳しく述べられている。

「意識と云ふ語は勿論西洋語の翻訳である。仏教にも意識と云ふ語はあるが、仏教で云ふ意味ではなくして、今日用いて居るのは、英語の *Consciousness* と云ふ語を訳したのである」(元良勇次郎『心理学綱要』弘道館、明40.4) この意味の語として「意識」が必ずしも定着していたわけではなかったことは、「心理学上の識覚(コンシラスネス)について云って見ても、識覚に上がらぬ働き(アンダー、コンシラス、ウォーク)が幾らかあるか知れぬ」(二葉亭四迷「私は懷疑派だ」明41・2)のような文に示されている。二葉亭のいう「識覚に上がらぬ働き」や「感情」も含めた心理における「活動範囲」の「余程広いもの」が、「意識」と区別して「精神」と呼ばれる。(元良同書)。すなわち自己の「精神」といえど完全には「意識」しきれないわけで、たとえば「半ば無意識にこんな悪戯をやるときはないとも限らん」(『坊っちゃん』六) ゆえんである。

上に言われている通り「意識」という語は、必ずしも認識できるものばかりを指すわけではなく、あるときには「無意識」の領域をも指し示すものである。自己の内部で起こる動きであっても、自身では認識しない出来事などを表した例が次のようなものである。

「かの女も画家も、意識下に直助によって動揺させられるものがあり・・・」

『川』岡本かの子

先ほどの注釈の続きによると漱石が特に関心を持って下線を引いたとされる「モーガンの『比較心理学序説』」には、「半意識」という意識の状態について翻訳として次のように書かれている。

「意識のいかなる瞬間においても、十分明瞭な意識の頂点を構成する支配的な諸要素に加えて、また、その傍らに、これらの支配的諸要素と直接にはほとんどあるいはまったく関係をもたないところのぼんやりと感じられた諸要素があるという事実を、明瞭に把握しなければならない。われわれはこれらを半意識として語ることになるだろう。

「半意識の下で」は、この「半ば意識に」とほぼ同義と見てよいが、大半の読者にとって、より見慣れない、術学的とも響く表現であったろう。心理学用語“subconscious(ness)”を意識した用語と見られ、漱石がかつてはこれに「副意識」の訳語を当てていたことは「彼が副意識の下に埋没せるダンカンの幽霊」（「マクベスの幽霊に就いて」）、「ゼームス杯に云はせると副意識下の幽冥界と僕が存在している現実界が・・・」（『猫』二）など、同様に「下」の字を伴って用いた例から窺われる。

このように、漱石はぼんやりと感じられる「意識」の領域についてそれを「半意識」と捉え、その後には「下」の概念を伴って表現していることがわかる。

「意識」と「上下」の概念との関連性について調べていく上で、夏目漱石が意識的に用いていたこの「意識」という語を例に挙げるのは、論を展開していく上で有効な手段であると考え、特定の作家にのみ挙げられる傾向であることを踏まえた上でここにあげた。これにより、無意識またはそれに準ずる意識の要素が、「下」という概念と共に用いられるという傾向があるといえる。

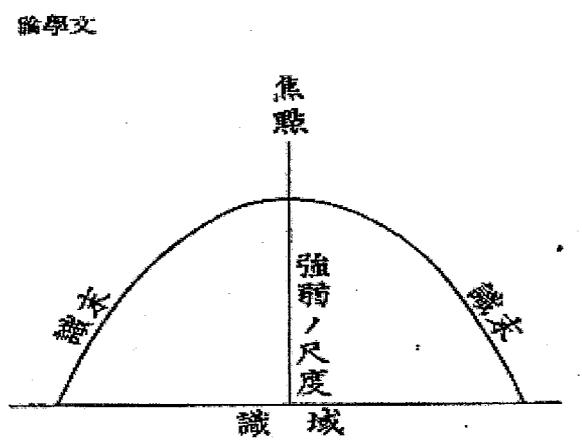
また夏目漱石は著書『文学論』<sup>vii</sup>において、「意識の説明は「意識の波」を以て始むるを至便なりとす。此点に関しては loyd Morgan が其書『比較心理学』に説くところ最も明快なるを以て、此处には重に同氏の説<sup>vii</sup>を採れり。」と前置きして、意識について図を示しながらその本質について述べている。

例へば人あり、St.Paul's の如き大伽藍の前に立ち其宏壮なる建築を仰ぎ見て、先ず下部の柱より漸次上部の欄間に目を移し、遂に其最高の半球塔の尖先に至ると假定せんに、始め柱のみ見つむる間は判然知覚し得るのも只柱部にかぎられ、他は単に漠然と視界に入るに過ぎず、而して目を柱より欄間に移す瞬間には柱の知覚薄らぎ初めて、同時に欄間の知覚これより次第に明瞭に進むを見るべし。欄間より半球塔に至る間の現象も亦同じ。

読みなれたる詩句を誦し、聞きなれたる音楽を耳にする時亦斯の如きものあり。即ち或意識状態の連続内容を取り其一刻をぷつりと切断して之を觀察する時は、其前端に近き心理状態次第に薄らぎ初め、後端に接する部は、これと反対に漸次其明瞭の度を加ふるものなるを知る。こは只吾人日常經驗上しか感ずるに止まらず既に正確なる科学的実験の保証を経たるものとす。(尚詳しくは Scripture 氏著『新心理学』第四章参照)

意識の時々刻々は一箇の波形にして之を図にあらはせば上図の如し。斯の如く波形の頂点即ち焦点は意識の最も明確なる部分にして、其部分は前後所謂識末なる部分を具有するものなり。而して吾人の意識的經驗と稱するものは常に此心的波形の連続ならざるべからず。

表0 夏目漱石作 「意識の図」『文学論』より



意識という語を具体化していく上では、漱石の例の様に図説し言葉の動きというものを図上に表すことを目的とするが、その過程において、文脈から読み取る意味というものに着目する必要があると考える。例えば、「私の意識上の人生は…という所で始まっている」という用例では「意識」とは「記憶」のことを指し、「自身の敗北の意識の上に立って」は「敗北という自覚」のことを指すように、「意識」というものが何を表すかによって、その文章の意味内容が変わってくる。上に上げたように、意味による分類と「上下」「高低」など、表現上に見られる物理的概念とを重ねて考察することで、「意識」という語が空間上でどのように位置づけられているかということをも明らかにしていきたい。

#### 第四節 先行研究

日野(2003)<sup>viii</sup>では、換喩と比喩において次のように述べられている。

##### ① 換喩的表現

語の指す対象が変わる変化は慣用表現によく見られる。たとえば、「さくら」とは「客を装って他の客の購買心をそそる人」を指すが、もともとは日本の国花「桜」を指した。この二つはどちらも「皆の注目を引く」という点で関係している。これは「桜」という「もの」から購買心をそそる「人」への変化である。

「もの」→「人」

##### ② 比喩的表現

具体的な意味から抽象的意味に変化する比喩的表現も、慣用表現によく見られる。「敷居が高い」と言えば、「行くのが遠慮される」という心理的状态を表すが、これはもともとは「敷居が高くてなかなかまたげない」という物理的状态から来ている。この二つの例の意味変化は「物理的→心理的」となる。

「もの」→「こと」

「頭が低い」などの形容的表現は、日野氏の言われる②比喩的表現に該当し、「頭を下げた状態」という物理的状态が、「謙虚な人間」という心理的意味を有するものになったと考えられる。「意識が高い」などの例も、実体のないものに視覚的な「高低」の概念を与えた比喩の一つであると考え、この場合、「意識」という抽象的なものに、物理的概念の位置づけを組み入れることで、具体性を持つようになった例であるといえる。意識という目に見えないものに視覚的效果を与えるという点からは、この問題を共感覚の見地から捉えることも可能かと考える。

「高低」の概念は視覚的に捉えられるものであると述べたが、実際に「高低」という概念こそ抽象的な側面をもっているということに触れておく必要がある。特に、「高い、低い」「上、下」などの形容詞的概念に関しては、全て物事の比較の結果として位置づけられるものであり、絶対値はないといえる。初山(2003)<sup>ix</sup>を参考に、「比較するという認知能力」の一部を抜粋する。

人間が有する認知能力の中で最も基本的なものの一つに「比較する」という能力がある。ここで言う「比較」とは、二つ(以上)の対象をある観点から観察・分析することによって、両者の共通点・相違点を明らかにするということである。我々は日常頻繁に比較するという認知能力を行使し

ている。(中略)以下では、比較するという認知能力が、言語の意味の基盤をなしているということを見ていく。

まず、「ゾウは大きい」という文は、「動物の平均的な大きさ」あるいは「人間の大きさ」を基準として、つまりは、ゾウをこの基準と比較して、大きさのスケールのプラスの領域に位置づけていると考えられる。また、「このゾウは大きい」という文は、「このゾウ」を「ゾウの平均的な大きさ」と比較した結果を述べている。つまりは「大きい」という形容詞の意味には、何らかの基準と比較するという意味が含まれていることになる。なお、「大きい」と同様に比較を前提とした日本語の形容詞には、「小さい」「高い/低い」「広い/狭い」「長い/短い」「遠い/近い」「深い/浅い」などがある。

ここに挙げられるように、「高低」「深淺」などの形容詞は比較を前提としているため、一般に「何メートル以上は高く」「何メートル以下は低い」などという絶対的な価値基準をもって言い表すことはできない。「高低」などの空間的概念を心情表現に用いる理由として、日本語母語話者の言語意識として、「何らかの基準と比較する」働きがみられることが、本研究の目的である「「上下」「高低」の概念を用いた心情表現が受容された外来語を用いる際にも現れるのはなぜか」という問題を解くための一要素になると考える。

- 
- i 『分類語彙表 増補改訂版』(2004) 国立国語研究所編 大日本図書  
ii 『青空文庫』インターネット上の無料文庫閲覧ウェブサイト。  
iii 辻幸夫編(2003)『シリーズ認知言語学入門〈第1巻〉認知言語学への招待』大修館書店収載 本多啓著(p 81~83)  
iv 『日本国語大辞典 第二版 第一巻』(2000) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編 小学館  
v 佐々木英昭(2000)『漱石文学全注釈8』若草書房(p 509)  
vi 夏目漱石(1936)『文学論』『漱石全集第十一巻』精興社収載(p 32~33)  
vii Morgan 氏式  
「A B C D E F etc. の図式が導入され、「Aなる焦点的意識」に対しての「a a' b' b' c' d' e' etc. なる辺端的意識」云々の説明がある。この図式はモーガン a"b" c" d" etc.」同書の数頁後(22頁)にあり、さらに十数頁後(第二章「意識の心理学的条件」、34頁)にある図では、“subconscious”と“marginal consciousness”すなわち「辺端的意識」とが同一視されていることがわかる。(佐々木(2000)同上(p 510)より)  
viii 日野資成(2003)「慣用表現における意味変化のプロセス 換喩と比喩(特集 国語学・国語教育)」『解釈 49(5・6)』収載(p 51~52)  
ix 粕山洋介(2003)「認知言語学における語の意味の考え方(特集 形式文法と機能文法)」『日本語学 22(10)(通号 269)』収載(p 75~76)

第一章 ステージとしての意識

日本語における「意識」とは心情を表す抽象的な概念であり物体として目に見える形で存在しないものであるが、言語上では「意識の上」「意識下」など、「意識」という概念を空間上に位置づけようとする様子が窺える。

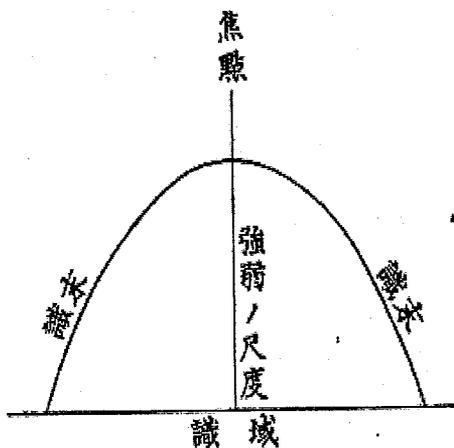
この章では、意識というものを一つの「場」として捉え、その「上下」の空間を用いた例を基本に、「意識」がどのように形作られ、捉えられているかということについて明らかにしていく。

序章で述べたように、夏目漱石は『文学論』において、「意識の時々刻々は一個の波形にして之を図にあらはせば上図の如し。斯の如く波形の頂点即ち焦点は意識の最も明確なる部分にして、其部分は前後所謂識末なる部分を具有するものなり。而して吾人の意識的経験と稱するものは常に此心的波形の連続ならざるべからず。」として意識を下図左のように表している。

本稿では、漱石の言う「焦点」をスポットライト、「識末」をライトの当たる範囲とし、「意識」を場所のようなものとして捉えた図を独自に作成した。この「ステージ」の図をプロトタイプとし、「意識」の位置関係を視覚的に捉えていく。

表0 夏目漱石作 「意識の図」  
『文学論』より

論學文



夏目漱石作

表1 「ステージのプロトタイプ」



著者作

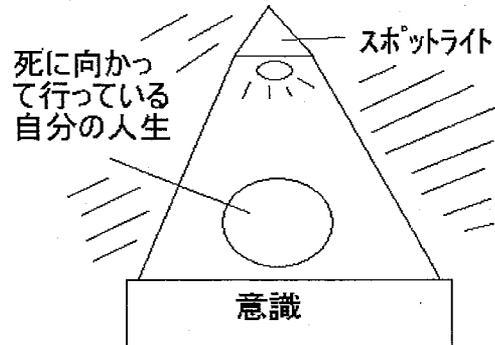
それでは具体的に、ステージの図を用いながら、「意識」とはどのような状態

のものであるかということについて、まず二、三用例を挙げながら説明する。

8 自分の意識の上の事実である。自分は此の儘で人生の下り坂を下つて行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知つて居る 『妄想』 森鷗外

この例は、喜怒哀楽などの感情に関わらず、「死に向かって行っている」自分の人生を客観的に捉え理解していると解釈される。

表2 例8「自覚している事柄の照射」

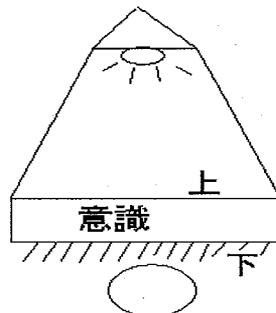


ここでいう「意識」を「現状理解・予測」という意味での「自覚」の意として捉えた場合、「意識の上」とは、自身の感情の中で確信を持って言える事柄、つまり自覚している事柄が位置する場所であり、明確に言えるものほどくっきりとスポットライトの当たった状態になる。それでは次に「意識の下」という例についてみていきたい。

28 実は平岡が東京へ着いた時から、いつか此問題に出逢ふ事だらうと思つて、半意識の下で覚悟してゐたのである。 『それから』 夏目漱石

28の用例を見ると、「覚悟している」という文脈よりこれもこの先起こる事柄を予測しているものと捉えられるが、そうすると先ほどの「意識の上」とは「意識」をステージとして捉え、その上でスポットライトの当たる事象が自覚されているものであるという論の説明がつかなくなる。

表3 例28「半意識の下」

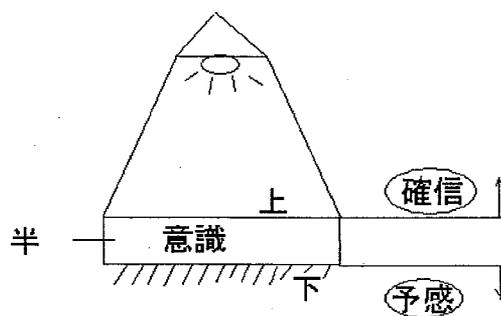


しかし「意識の上の事実」を「意識の下の事実」、「半意識の下」を「半意識の上」と置き換えると不自然さを覚えることから、「意識の上」と「意識の下」という概念とは「自覚」という枠組みの中でも、それぞれ特徴があり区別されているということは確かだといえる。

意識の上がスポットライトの当るステージ上だとすると、意識の下とはそのステージの下側に位置する場所である。これら二つの例における決定的な違いとは、予測できる事柄に対する自身の心構えであり、それは「意識」を自分の意志として捉えるか、または「意識」というものに自身がコントロールされるかという点で区別される。「意識の上」とは、「自分の意識の上の事実である・・・そしてその下り果てた所が死だということを知っている」というこの文例から解釈するに、確信があること、むしろそうなることを自身の意志によって願っているようですらあるように、自身がはっきりと自覚している事柄を示す。

一方「意識の下」の場合、「いつかこの問題に出会うことだろうと・・・覚悟していた」と表現されることからわかるように、そのように感じる自分の意識に逆らえない、意識にコントロールされている印象である。もっとも、「半意識の下」という表現を忠実に受け止めるならば、半意識とは「意識」のステージ上の縦方向中間辺りに存在し、「意識上」と「意識下」のちょうど真ん中に位置すると考えるべきであり、はっきりと自覚しているようでもあり、一方そのような意識のせいでそう思わされているといったような、非常に曖昧な状態であるといえよう。

表4 「意識の上下」



ここに次のような例を挙げる。

19 そのため翻って、どんなに製作に向っての無私が必要だか、意識下の均衡が大切だか思い知らされているといえるのである。 『透き徹る秋』宮本百合子

ここには「意識下の均衡」とあるが、「製作に向って個人的な感情を加えない

こと、また意識下においてバランスを保たなくてはならない」というこの文章の解釈より、自身の感情においてコントロールすることのできない意識下という場所において、自身の意志でバランスを保つ努力が必要であることを示している。

ここでは僅かな用例からこのような結論を導いているが、この傾向については、この先様々な用例を取り上げていく上でも明らかになっていくものであり、ここでは前置きとして結論から述べる。

ここから先は今述べたことを裏付けるものとして、このステージを基本形に、「意識の上下」「意識外」「意識に上る」などの用例について、意味論の観点と形状性というプロトタイプの観定の両側から考察を進め、抽象的な概念がいかに言葉によって位置づけられ、そこに何が表されるかを述べていく。

## 第一節 意識の上

第一節では、「意識の上」と表記されている文例について扱う。「意識の上」とは、図でいうステージ上を指す。

### 第一項 自覚

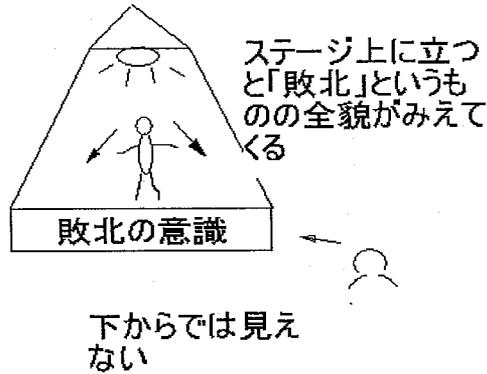
以下に挙げる例には「敗北」という、事態に直面している当事者しか感じることのできない心情が描かれている。

- 7 自身の敗北の十分な意識の上で立って、その社会的・歴史的要因を作品の中でつきつめようとする熱意を欠いている 『落ちたままのネジ』 宮本百合子

『広辞苑』<sup>iii</sup>によると「自覚」とは「①⑦自分のあり方をわきまえること。自己自身の置かれている一定の状況を媒介として、そこにおける自己の位置・能力・価値・義務・使命などを知ること。⑧自分で感じとること。」と定義されていることから、この例で言われる「意識」とは、「自覚」の意味を有するものであると考える。

この例はステージというプロトタイプの観点から捉えると、最も具体的に表現することのできる比喩が用いられている。ステージという舞台が「敗北という意識」だとして、本人がその上に立つことになる。そうした場合、ステージの下からでは見ることのできなかつた敗北というものの全貌がそこから見えてくることになる。

表5 例7 「意識の上に立つ」



例えば街の景色の全貌を眺めようとする場合、人は街の位置する場所よりも少し高い場所から、つまり上方向から見下ろす形となる。地図も然り、現在地は上から見た図でしか確認できない。それと同じように、敗北の原因をつきつめるためには、まずステージに上がる必要があり、更にそこに立つことでその場を制し、踏みしめることで新たなステップへ向かっていこうとする姿が描き出されている。

表現の類似性の観点よりここで「自覚の上に立つ」の二例を挙げる。

- ① 今後の生活が個人各自の自覚の上に立つ生活であらねばならぬというのは、この点に自覚することをいうのだと思います。

『婦人指導者への抗議』 与謝野晶子

- ② そして悲しげなし近代的個性の自覚の上によるめき立っていた文学は、最近三年間に、殆ど文化として抵抗らしい抵抗さえも示さずに崩れ終った。

『よもの眺め』宮本百合子

表6 例① 「意識の上に立つ生活」

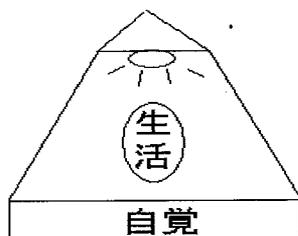
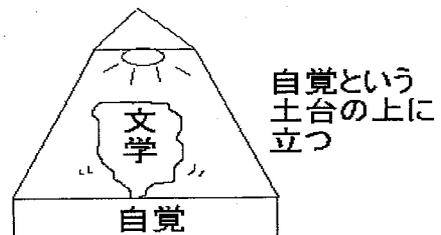


表7 例② 「自覚の上によるめき立つ文学」



この二例は擬人法による比喩である。①の例の場合、先ほど述べた例と同様の用法ではあるが、「今後の生活」が「自覚」というステージ（足場）に立つということを示している。建つではなく立つとされているのは、物として受身的にその場に組み立てられるのではなく、自分の意志でその場を踏みしめ、制すという意味合いが込められているからであろう。一方、②の例の場合、文字通りよめき立っていた「文学」は崩れ終ったとあることから、しっかりと安定した状態で立っていたのではないことが窺える。「～の上に立つ」という表現をステージのプロトタイプで捉えた場合、上に立つことで全貌が見えること。また上に立ち踏みしめることでそれを制すこと。一方、しっかりと立っていない場合には、崩れ去る可能性もあることが暗示される。

何かの精神的活動（生活の文学）のベースになるものとしての「意識」を視座や立脚点として「ステージ」として捉えていることがわかる。

## 第二項 記憶

### 1. 映像

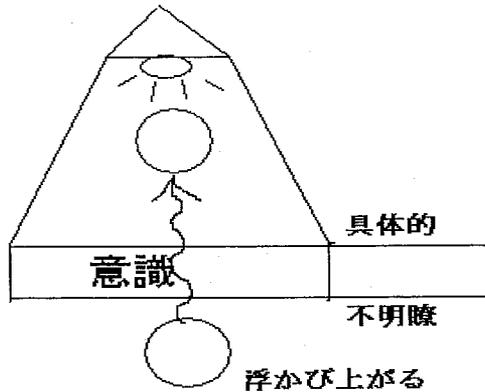
ここに挙げられるのは記憶のうち、映像として思い描くことのできるものについてである。

3 いろいろな印象や…さまざまな刺激が…色々の変わった形や響きになって意識の上に浮かび上がってくる。 『丸善と三越』寺田寅彦

4 由子の意識の上に暫く紫の前掛が鄙びた形でひらひらした。段々その幻影がぼやけ、紐だけはっきり由子の心に遺った。 『毛の指環』宮本百合子

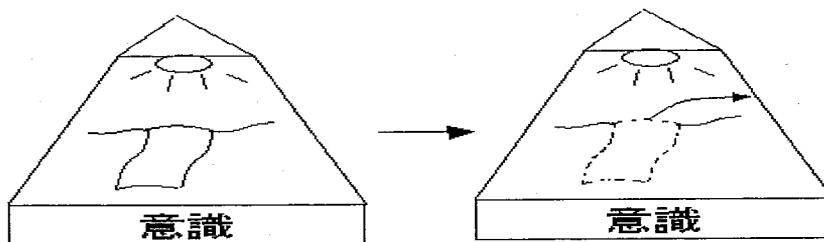
例3は、実際に見たものを思い起こすこととは少し質が違うが、「色々の変わった形や響きになって意識の上に・・・」とあることから、ある種の映像としてイメージされていると考えられる。ここに「浮かび上がる」という表現が用いられていることより、思い描かれる映像とは下方向から上に向かって浮かぶものと捉えられていることがわかる。つまり「思い描く」または「思い出す」というプロセスにおける「意識」とはステージ上でライトの照射をうけることでその姿に具体性を持つようになると考えられる。

表8 例3 「意識の上に浮かび上がる様子」



例4では、記憶から忘却への過程として、鮮明だった映像がだんだんと朧気になっていく様子が描かれている。表0<sup>iv</sup>において、夏目漱石は現在目の前に見えている事物と意識の働きを例に示していたが、この例は基本的に漱石論と同じ動きを示しており、「前掛」の映像が中心から「識末」に向かうにつれて、だんだんと薄れていく様子を表している。言い換えると、中心部でライトが当たっていたものがステージ上「端」に移動することでライトの照射が弱まり、薄暗い中でその姿が見えにくくなっていく様子を示す。

表9 例4 「意識上の映像が薄らいでいく様子」



それでは、映像として思い描くことのできなかつた例を挙げる。

- 5 その蓄音機は窮理の学に本づくものだといふことなどは追尋しようとしなかつた。スペクトラを退治した写象なども無論意識のうへにのぼつて来なかつたのである。 『念珠集』 斎藤茂吉

この例文の基礎になる構文を見ると、「写象」が「意識の上へのぼる」と表現されている。このことより、一度目にしたことのある事柄、またはイメージできる映像とは、意識の下部分に不明瞭な状態で貯蓄されており、上方向に上ることによって具体性を帯びていくものと考えられる。

## 2. 過去の記憶・新たな記憶

「意識」とは過去、現在などの時制に関わらず、自身が認識している事柄を指し示すものであり、それは記憶と忘却のプロセスにも関連する。以下に挙げられる例は、記憶として認識されている過去の出来事を表わすものである。

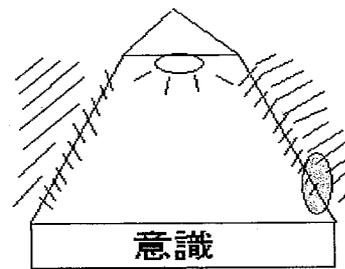
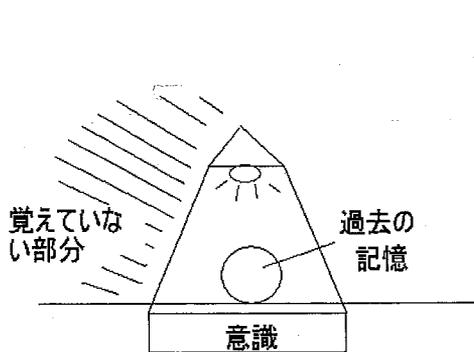
1 私の意識上の人生は、突然父があらわれて…新しい家のなかでようやく始まっている。  
『幼年時代』堀辰雄

49 そうしてその過去が過去となりつつも、猶（なお）意識の端に幽霊のような朧気（おぼろげ）な姿となって佇立（たたず）んでいて、

『木下杢太郎著『唐草表紙』序』夏目漱石

表 10 例 1 「意識上に存在する記憶」

表 11 例 49 「意識の端」



例 1 は、自身の過去の記憶について述べているものである。人生とは生まれた瞬間から始まっているものだが、物事を認識し始め、またそれを記憶として留めておけるようになるのは生後数年経ってからのことである。この例では、そのような幼児期の「物事を認識し始める時点」からの記憶が意識上に存在することを示している。意識上の照射される部分にある事象は記憶として存在し、光の当たらない部分にあるものは記憶にない事柄となる。

例 49 は、過去の出来事というものが、今なお忘れ去られることなく意識されているというものである。およそ感情とは関係なく「記憶」と「忘却」の作業は行われる。意識の図において、夏目漱石は現在目の前に見えている事物と意識の働きを例に示していたが、これは一般的な記憶（過去の出来事等）にも関連し、氏の言う「識末」つまり照射範囲の境界が記憶と忘却のボーダーラインとなる。ここではその境界線を「意識の端」と表現しているが、新しい記憶が入ることによって記憶の中心部（ライトの真下）は更新されていき、古い記憶は端へと押しやられていく。「なお意識の端に朧気な姿をなつて佇立む」とは、

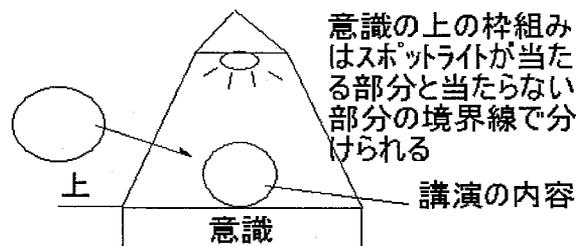
ある特定の記憶がいつまでも意識の端に居座り続け、鮮明ではないものの忘れきらない状態であることを示す。先の「自覚」の例は、ステージの「上下」もしくは「昇降」の観点でのみ表されるのに対し、「記憶」は「上下」に加え、ライトの照射範囲をもって「覚えていること」「忘れていないこと」を表示し分けることができる。照射される部分を強調することで、影＝unconsciousの部分が表現されること、また、意識の「端」と表現されることより、領域性が浮かび上がる。

また「記憶」とは過去のことを示すのみではなく、これから新たに記憶されるものをも指す。

10 そうするとその個人でない集合体のあなた方の意識の上には今私の講演の内容が明かに入る。 『現代日本の開化』夏目漱石

この例文は今目の前で行われている講演の内容がこれから新たに記憶されるという事についてであるが、「意識の上に入る」と表現されていることから、意識が領域性のあるものとして捉えられていることがわかる。漱石は意識の縦軸上で意識の強弱を表していたが、この例に挙げられているような「新しい情報」とは、意識というステージの上部、更にはスポットライトの真下あたり最も照射の強い場所に位置するものと考えられる。

表 12 例 10 「新たな記憶」



以上のことより次のようなことが言える。

- ① 「意識の上」には「把握できている事柄」「明瞭な自覚」が存在する。
- ② 「意識の上」では「映像」や「記憶」を明確に復元、または作成できる。
- ③ 「意識の上」＝ライトの照射範囲であり、「古い記憶」はライトの照射範囲外に寄っていき、ステージ上から落ちた記憶は「意識の下」部分に貯蓄され、必要に応じて意識上へ上る。

## 第二節 意識の下・意識下

「下（か）」の語における解釈は辞書によって多少異なるが、ここでは二点の辞書を挙げる。

〔解釈1〕『日本国語大辞典』v

下〔語素〕

漢語の名詞を受けて支配や影響などを受ける範囲にある意を表わす。

\*小説の方法（1948）〈伊藤整〉日本の方法「漱石は一時期明らかに鏡花の影響下に立ち」

\*茂吉の方法（1952）〈臼井吉見〉「肋膜が癒えもせぬうちに、災天下に相撲の応援に夢中になったというあたりは」

〔解釈2〕『広辞苑』vi

下（呉音は下）

① したの方。しも。また、表に現れない部分。「下方・下流・意識下」

② 影響を受ける範囲や地位にあること。「門下・県下・戦時下」

「意識」＋「上」の概念の組み合わせが、意識というものを自身が制していく意味合いを持つのに対し、「意識下」とは、自身が意識というものにコントロールされている印象を受けるが、それは解釈1や解釈2の②にあるように、「～下」という場所に位置することで、その支配や影響を受ける立場に置かれると認識されることに起因する。以下の例では「意識の下（したもしくはもと）」という表現も挙げられるが、これも「意識下」と同様、影響や支配を受ける関係にあるものを表わす。

### 第一項 職業意識

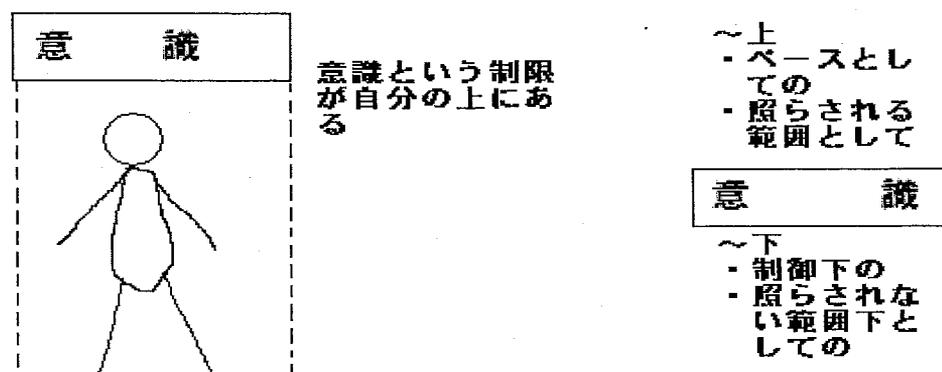
23 少なくともそういう意識の下で自分は物を書くのである。だから、書いたり饒舌ったりした後ではキット余計な無駄なことをしたように 『浮浪漫語』 辻潤

30 こうした種類の挿画や裏絵は執筆画家の日常の職業意識の下に製作されたものであろうと思うが 『明治三十二年頃』 寺田寅彦

『広辞苑』viiによると職業意識とは、「職業に従事する者が自己の職業に対して形成する特有の意識」と定義づけられている。例23では職業とは明言されていないが、「そういう意識の下で物を書く」といったように、自身が執筆をすることに関して特別何かを意識する、つまり自身の職業に対し自覚を持って仕事をしていると解釈される。よってこれも「職業意識」に分類した。「意識の上」

という表現が、自身が感情を踏まえた上で自発的に行動するという印象を与えるのに対し、「〇〇意識の下」とはその「意識」というものに自身がコントロールされている印象を受ける。つまり、職業を意識することにより、その意識が自身をそのような行動へと導く、と解釈される。

表 13 例 23・30「意識の下」



上の図のように意識が頭上にあることにより、その意識の制限を受ける状態にある。したがって、例 30「職業意識の下に製作される」といった表現に見られるように、その行動が本人の意思によるものではなく、「職業」という意識によるものとなる。この意識によるコントロールが高じた結果、意識の下で「無意識」の行動が起こるようになる。

## 第二項 無意識

自身が意識というものに完全にコントロールされた場合、「意識下」とは自身の意思の及ばない場所となり得る。上に挙げた解釈 2 の①に、「意識下」の説明として「表に現れない部分」とあるように、「自覚されない事柄」が存在する場所として認識される。

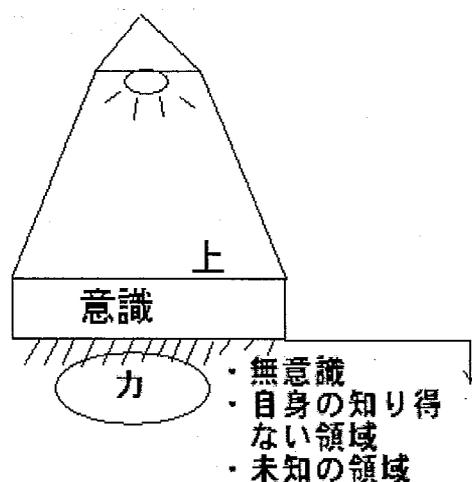
用例を挙げたいと思う。

- 20 かの女も画家も、意識下に直助によつて動揺させられるものがあり、二人ともめい／＼勝手にあらぬことを云つてるやうで 『川』岡本かの子
- 21 それは如何なる意識下のカー作家ジイドが好んで潜入し、格闘するところの無意識の力に作用されてであるのか。 『ジイドとそのソヴェト旅行記』宮本百合子
- 22 藝術創作の過程における意識下的なものの力を過大視する評価のしかたに賛成を表さぬシルレルの態度は十分うなずけるが 『バルザックに対する評価』宮本百合子

これらの例文に関しては、やや抽象的な表現が見られるが例 21 や例 22 の文章に関しては、「意識下」という部分が未知の領域であること、または自身の知りうる範囲を超越した力と捉えられていることより、自身の関知しない意識の場所として「無意識」と言い換えて解釈する。

「意識の上」と表現されている「9 何物をも聞くまいとする。又意識の上でも、いつも自分が聞き馴れた祈祷の詞を聞いたり、又繰り返して唱へたりする時、…何物をも感じまいとしてゐる。『パアテル・セルギウス』レオ・トルストイ」この例では、自身の思考または意志によって自身の行動を規制しようとしている様子が窺えるが、その決意は「意識の上」でなされている。これらのことより「意識の上下」の明らかな対比が浮かび上がる。

表 14 例 21 「意識下の力」



以上のことより次のような特徴が浮かび上がってきた。

- ① 「〇〇意識の下」では意識によって自身がコントロールされる。
- ② 「意識の上」が自覚のある部分ということの対比として、「意識下」は「無意識」の領域、または本人の感知していない「未知の領域」を示す。

### 第三節 意識外

「無意識」に関連して、「意識外」と表わされる例について述べる。意識の領域性については「意識の中」という例より既に述べてきたことであるが、この「意識外」との表現の存在により、照射範囲の境界がより強調される。

18 人間は罪を犯そうという意志がなくても、知らぬ間に、自分の意識外に於て、罪を犯していることがある。 『穴』 黒島傳治

51 意識外の彼自身は、——言はば第二の彼自身はどうかう云ふ心もちを或短編の中に盛りこんでゐた。 『或阿呆の一生』 芥川龍之介

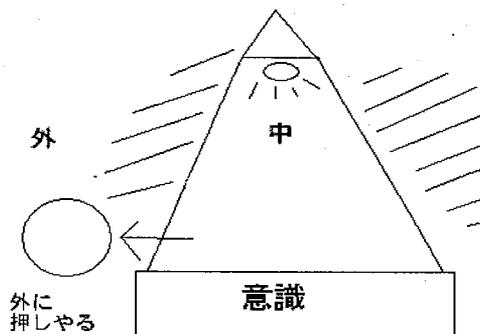
これら「意識外」という例に共通することは、「意識外に於て罪を犯す」や「意識外の彼、つまり第二の彼は、そのような心持を作品の中に盛り込んでいた」というように、「自覚なくして何か行動をしている」ことである。「意識下」における「無意識」の例との共通性も見られるが、「支配」や「影響」などの力によるものではないという点で区別される。ここに見られる例における特徴として注目すべき点は、ステージ上におけるライトの照射範囲の問題である。

52 静穏に、淀みのない彼の書翰は、ここまで来ると、見えない曇を帯び、無理に、何ものかを意識の外に押しやったような形跡が… 『南路』 宮本百合子

53 このあたりの別荘へ来ている者だろうと思ったきりで、それ以上べつに好奇心も起らないので、女のことは意識の外に逸してその土手を上流の方へ歩いて往った。 『墓の血』 田中貢太郎

例 52、例 53 に見られるように、感知したくないもしくはする必要のない事象に関しては、意識的に思考から削除しようとする働きというものがある。ステージ上でライトが当たっている部分を「意識の上」ないしは「意識の中」として、そこに存在する事象を「外」に向かって押しやるという動きから、照射範囲を境とする次の図のような枠組みが見えてくる。

表 15 例 52 「意識の領域性、「意識外」」



ステージ上でライトを浴びている事象が、「意識される事柄」であることを前提にした場合、その照射範囲から外れた事象は「自覚しない事」や「忘れられた事」となる。「中」と「外」とを対比させることにより、照射範囲の境界線

が明確になり、視覚的に「意識の中」と「意識の外」を区別する事を可能にしている。

以上のことより次のことが明らかになった。

- ①意識外とは「無意識」の領域を示す。
- ②意識する必要のないものを意識外に出すことで、「無関心」の領域に押し出せる。
- ③「中」と「外」の対比により、境界線が明らかとなりその部分が意識の端と認識される。

#### 第四節 意識に上る事象

これまで意識と「上下」の位置的概念との関わりについて述べてきたが、「意識」に関わる空間的概念として「動詞」「のぼる」または「あがる」と表される用例について触れる。

##### 第一項 自覚

『広辞苑』<sup>viii</sup>によると「意識に上る」とは、慣用句で「それまで気づいていなかった事柄がはっきりと認識される」と定義されている。以下の例は辞書のおり、例 78 は、声をかけられたことをきっかけに瞬時に「認識する」ことを意味し、例 83 は、状況から次第に自身の身の危険を「自覚する」ようになっている。

78 彼女は、幸子がそこにいるのを知りながら忘れていた瞬間の長さ、深さが、

幸子に声をかけられ初めて朝子の意識にのぼった… 『一本の花』宮本百合子

83 此場の危険は次第にはつきり意識に上つて来た。

『防火栓』ゲオルヒ・ヒルシュフェルド 森林太郎訳

表 16 例 78「きっかけを元に意識に上る事象」

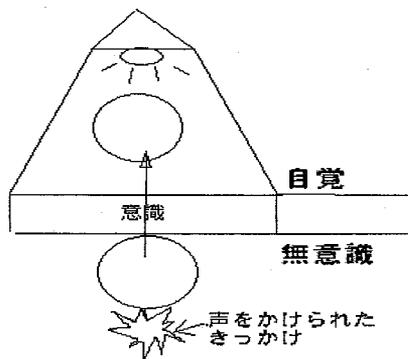
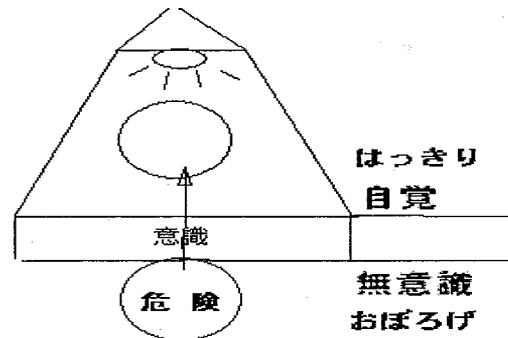


表 17 例 83「次第に強まる危険意識」



「意識に上る」速度に違いはあるが、「声をかけられた」ことや、「身の周りの状況を認識した」ことなど、外部から何らかの刺激を受けたことによって、自覚するようになることを「意識に上る」と表現するということがこれらの例より考えられる。

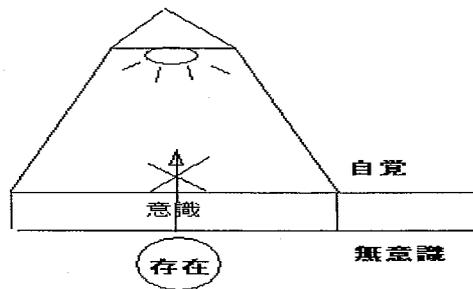
それでは、「上らなかった」という否定形が用いられている用例について触れておきたい。

75 それにつけても、一人というものの存在が、その時には意識に上らなかったほどの影が、立ち退いてみると、無用の用の大きさの予想外なのに驚かされることがある。

『大菩薩峠 年魚市の巻』中里介山

例 75 は、特にその人の存在が「気にかからない」ことを表している。これは、人の存在を認識する、または接触するなどして刺激を受けているものの、特にそれに影響されることがなく、その時はその人を特に「認識しようとしなかった」と解釈される。

表 18 例 75 「意識に上らない人の存在」



「意識に上る」とは何かをきっかけに「意識下」に存在していた事柄が「意識」のステージ上へ上っていくことによって「自覚」または「認識」する状態へと近づいていく様子を表す。更に付け加えるとこの「上がる」という概念は、「意識しなかったことを意識するようになる」という心情変化の様子をステージの下からステージの上への物理的移動として捉えることにより、「無意識」から「意識される状態」へ、または「混沌とした状態」から「明瞭な状態」への移動を具体的に表そうとする様子が窺える。

### 第一項 思考

上に挙げられた例が「自覚」つまり「状況の認識」に関わるものであるのに対し、「思考」とは「疑問」や「考え」などを表わす。

70 物質的には辛うじて米塩に事欠かぬ程度の貧乏人であるから、他人から、粗末に扱われた場合、今まで気にも留めなかった些事が、一々意識に上るであろう。

『御萩と七草粥』河上肇

73 もっともこれは東京駅へ出迎えた妹を見た時から、時々意識に上ることだった。

『春』芥川龍之介

76 おやじ自身はそれをはっきり意識に上す力はなかったかも知れない。けれど晩年にはやはり其れに促されて、何となく…

『雛妓』岡本かの子

「それまで気にとめていなかった些事」が「他人から粗末に扱われる」というきっかけで意識に上ってくる動き、「出迎えた妹を見た」ことをきっかけに「度々意識に上ってくる疑問」といったように、何かをきっかけに自動的にステージ上へ上ってくる「思考」や「疑問」なども「意識に上る」と表現される傾向にある。例 76 は、加齢のため脳の機能が衰えてきた父親のことについて話しているのであるが、「はっきりと意識に上す力はなかったかもしれない」とあることから、ステージ上部は明瞭な思考、下部は不明瞭で混沌とした志向が存在する場所と捉えられることがわかる。

表 19 例 70 「何かをきっかけに  
自覚されるようになる事象」

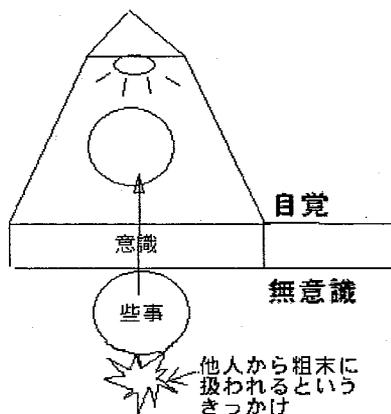
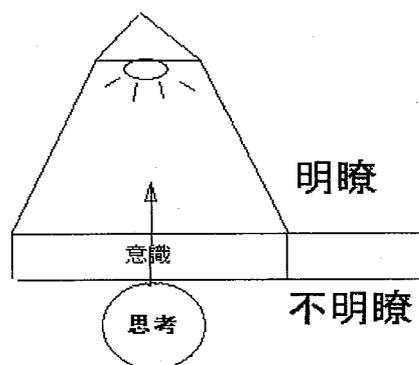


表 20 例 76 「ステージ上にいくと  
明瞭になる思考」

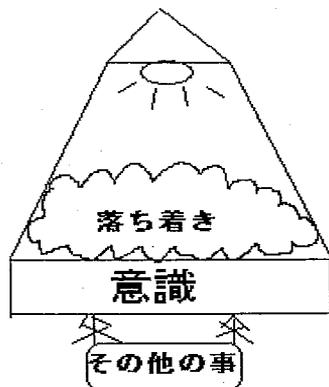


また次の例 74 からは、ステージ上が他のもので溢れており、それ以外のことが意識上に上っていくことができないとある。

74 そのとき長十郎の心のうちには、非常な難所を通して行き着かなくてはならぬ所へ行き着いたような、力の緩みと心の落ち着きとが満ちあふれて、その他のことは何も意識に上らず、備後昼の上に涙のこぼれるのも知らなかった。

『阿部一族』森鷗外

表 21 例 7 4 「ステージ上が一杯で意識に上らない例」



思考や疑問などは「考えよう」とする意識なくして自動的にステージ上へ上るものであるが、それは「上す力が不足している場合」または、「ステージ上が他の事で埋め尽くされている場合」には機能しないということがいえる。

- ① 「意識に上る」とは何か外部からの刺激をうけたことをきっかけに、事象が「無意識」「無自覚」の下部分から上方向に上り、意識されるようになる。
- ② 「意識上」が何かで一杯になっている状態の時、また「上す力」が不足している場合「意識に上る」という動きは機能しない。
- ③ 「意識に上る」事象とは、考えようとする思考とは別に自然に浮かぶ「疑問」などを指す。

「意識」におけるステージのプロトタイプとは次のようなものを示す。

ステージ上…ライトの当たる範囲。ライトの下部分が最も照射が強い。「自覚している事柄」「明瞭な記憶」

ステージ下…ライトの当たらない部分。意識にコントロールされる。

「無意識」「不明瞭な記憶」本人の関知しない「未知の領域」

ステージ中…ステージ上、照射範囲内を示す。

「自覚している事柄」ステージ端部分に存在するものに関しては照射が弱く、「おぼろげな記憶」を指す。

ステージ外…ステージ中と対比して、照射範囲の境界から外を指す。

「無意識」または「無意識のうちに起こす行動」が存在する。意識的に気にとめない事柄も指すので「無関心」も含む。

i 夏目漱石(1936)『文学論』『漱石全集第十一卷』精興社収載 (p 32~33)

ii 半意識の下

序章 (p10) でも詳しく述べているが、補足説明として挙げる。例 28 は、『日本国語大辞典』において「半意識」の文例で挙げられているものであり、半意識とは「無意識」に同じと定義されている。それに従う場合、この例における「半意識」とは意識しない状態であることを指すが、『日本近代文学大系 26 夏目漱石集Ⅲ』角川書店 (p 348) の注によると、この文章について次のように指摘されている。

「半意識の下で」⇒「なかば意識の下での意か。漱石は潜在意識の意味で、「副意識」の語をよく使用するが、(「ゼームス杯に云はせると副意識下の幽冥界と僕が存在して居る現実界が一種の因果法によつて互いに感応したんだらう」(「吾輩は猫である」二)「半意識」はそれとも違う珍しい用法である。)

文脈から見ても辞典の「半意識」の解釈には頷けないことより、これは本来の「半意識」の意味を有するものではなく、夏目漱石が意図的に「半ば意識のもと」という意味で用いたものであると解釈し、本稿では『日本近代文学大系』の注に従う。

iii 『広辞苑』CASIO 電子辞書 EX-word

iv 漱石は現在目に見えている映像のことを例に意識の図を説明している。序章 (p 10~11) にて『文学論』「意識」の図に関する説明全文を掲載。縦軸上→表 0

夏目漱石作「意識の図」『文学論』より漱石の意識の図参照

v 『日本国語大辞典 第二版 第三巻』(2001) 日本国語大辞典第二版編集委員会  
小学館国語辞典編集部編 小学館

vi 『広辞苑』CASIO 電子辞書 EX-word 以下全文。

下 (呉音は下)

- ① したの方。しも。また、表に現れない部分。「下方・下流・意識下」
- ② 影響を受ける範囲や地位にあること。「門下・県下・戦時下」
- ③ 位や級のしたの方。低いこと。いやしいこと。「下等・下種 (げす)」
- ④ 順序であとの方。「下巻 (げかん)・下旬 (げじゅん)」
- ⑤ 上から下へ動くこと。おちること。さがること。「落下・下車 (げしゃ)・下痢 (げり)・下付」
- ⑥ 中央から地方へ行くこと。また官庁から民間へ移ること。「西下・下野 (げや)」

---

⑦ 相手に属するものの下にいる意で、敬意を表わす。殿下・貴下」

vii 『広辞苑』CASIO 電子辞書E X -word

viii 同上

## 第二章 球体、山としての意識

### 第一節 球体としてのプロトタイプ

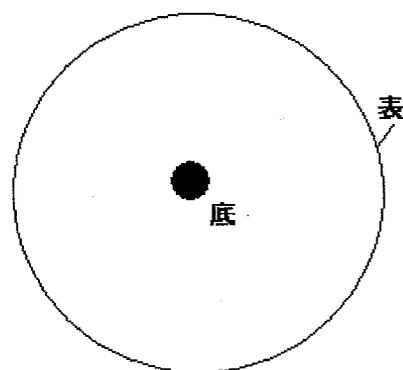
第一章では漱石の「意識」の図を参考にステージのプロトタイプについて取り上げてきたが、各用例を忠実に照らし合わせていくと「ステージ」のプロトタイプに合致しないものが表れる。序章で述べたとおり、「意識」というものは「ステージ」以外に「球体」と「山」計三つのプロトタイプで捉えられる。この章では、そのステージ以外の例について述べていく。

ここでいう球体とは、地球のような形をした容積のある立体であり、中心部が最も深い「底」の部分であり、表面はどの方向から見ても表であると認識されるものである。

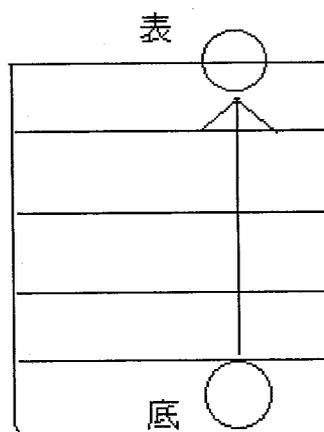
また、球体を断面的に捉えた層状のものを球体の一部とする。この図における「表」に何か事象が表れた状態は「ステージ上」の照射とほぼ同義であるが、「底」「表」などの表現を忠実に捉えた上で区別し、ここではこれらをステージの例外的プロトタイプとして扱う。

表1 球体のプロトタイプ

①球体



②断面図



#### 第一項 意識の奥・意識の軽重

例文の中には、「意識の奥」や「意識が重い」などがみられるが、これらの表現より、意識というものが「上下」の概念以外にも、「奥行き」また「重量」を持つものとして捉えられている事がわかる。

45 いかほどの高处に彼女が在ろうとも、彼だけは的確に到達することができるので  
…彼の意識の奥に横たわるこの自信も強度を増して来る。『美しき月夜』宮本百合子

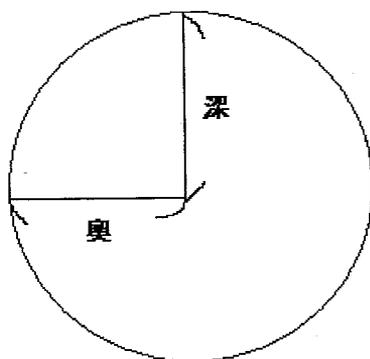
この用例は、「意識の奥に横たわる自信」と表現しているが、手出しのできない揺るぎない場所でどっしりと横たわる感情とは、他者の干渉を許さず、また影響もされないという印象を受ける。第一章で説明した、例 83「此場の危険は次第にはつきり意識に上つて来た。『防火栓』ゲオルヒ・ヒルシュフェルド 森林太郎訳」の例のように、「意識に上る」という表現が、感情がエレベーターのようなものに乗ってステージの上方向へ進んでいくものとして捉えられるが、「意識の奥」という概念は「意識」が「手前」からだんだん奥の方へスライドしていくものではない。

この例の場合、自分の中に揺るぎない「自信」があるということを示しているが、その感情の収まる場所が「意識の奥」なのであって、その「奥」という概念は対極にある「手前」という概念を対として持たない。よって、自信があるという感情は、「次第に意識に上る」などのように段階的に表すことはできないということになる。そうした場合、「上下」の概念との関わりを持たず、またライトによる照射を必要としないこの例は、ステージのプロトタイプによって説明をする必要がないとみなされる。

46 どんなみじめな思いに心が打ち摧かれるであろうか、ということが意識の奥ふかくかすかに予想はされるのではあったが 『癩』島木健作

またこの例に見られるように、「意識の奥ふかく」と認識されるということは、「意識」は、奥行きだけではなく「深さ」も兼ね備えた状態にあるものと考えられ、次のような形で表わされる。

表 2 例 46「意識の奥深く」



次の例は「ここでは、「意識が重い」と表現されているが、これは「奥」の例とは違い、「軽い」の対極になっており、精神的な負担が減れば「意識」は「軽く」なってくると考えられる。

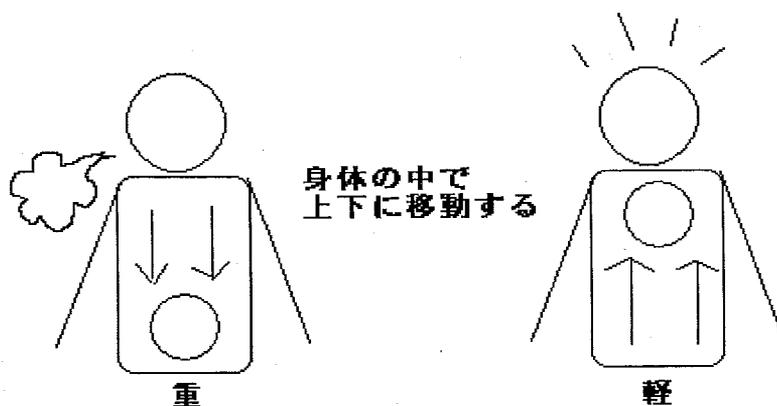
67 夫の今にも破れそ（ママ）うな心臓——それを預かっているといふ意識の如何に

重いこと。夫はもう死んでゐるかも知れない。そんなことも彼女は思つた。

『川端康成第四短編集「心中」を主題とせるヴァリエーション』梶井基次郎

ただし、この場合意識の軽重とは、意識というもの全体が人間の体の中で下方向に沈んだり、上方向に浮いたりする様子として捉える方が自然と考える。

表3 例67「意識の軽重」



68 いつも病気をして、母にお手数をかけているという意識が胸の奥に、しみ込んでい  
るせいでもあろう。 『ろまん燈籠』太宰治

例68にも見られるように、母に対する思いを含んだ意識が胸の奥に存在する  
とある。ここに挙げられる球体という形は、日本語の上で認識されている「心」  
というものに一番近い形のように思われ、これらをつきつめていくうちに日本語  
母語話者がどのような物事を「心」で考え、またどのような事象を「頭」で  
考えるかということにつながっていくと思われる。

## 第二項 意識の表面・底 —感情—

ここに挙げられるのは、自動的に浮かび上がる思考や疑問などではなく、「日  
常的に秘めている思い」、または「恩情」などの「情」を含む心の動きを表わす  
ものである。

33 「どうにかしなければならぬ」という欲求はしばらくの間も私を離れたこと  
はありませんが…けれどもなかなか明瞭にそのことが意識の表面には浮かび  
出ませんでした。 『「別居」について』伊藤野枝

38 当時の婦人はどんなに自分達の希望を殺して生きていたか、また殺させている  
という暗黙の恐怖が男たちの意識の底を流れていたかが解る。

『女性の歴史—文学にそって—』宮本百合子

39 それは、ソヴェト芸術のもっている明瞭な階級性を、観る者が理解しない場合

か、意識の底でそれに反抗している場合にだ。

『ソヴェトの芝居』宮本百合子

例 33 は、「欲求が離れたことはなかった」という文脈から、それはいつも抱き続けていた思いであり、またそれが「意識の表面に浮かび出なかった」ということから、その感情は常に意識のどこかに沈んでいたということが窺える。次に例 40 を見てみると、「意識の底で反抗している」とある。意識は「表面」と「底」で表されることから、「地表と地底」もしくは入れ物状の形態として捉えられ、その間を感情が行き来すると考えられる。

「心の底から感謝をする」という表現が言葉の上で偽りのない思いであることを示すのと同じく、意識の底に存在するのは反抗心や恐怖、不安などごまかすことのできない正直な感情であることも特徴としてあげられよう。また「日常的に感じている思い」とは、普段意識の底部分に留まっているということが考えられる。

また意識の「表面」と「底」という概念と切り離せないのは、水との関係である。「表面」と「底」を関連付けて考えた場合、「底」とは容器の下部分、海や湖では底面になる部分を指し、「表面」はその水面である。そして底面と表面を境にその間に空間が生まれる。このように底面と表面で区切られた空間とは水中である。例 33 の「表面に浮かぶ」や例 38 の「意識の底を流れる」などの表現より、意識というものが水と関連付けて捉えられているという論が強調される。

表 4 例 33 「表面に浮かぶ」

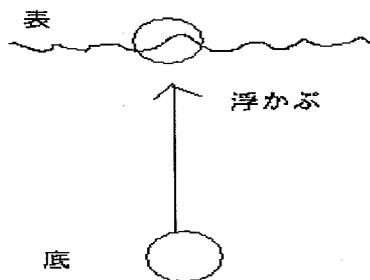
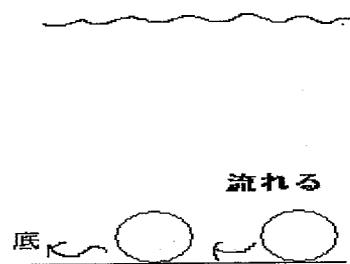


表 5 例 38 「意識の底を流れる」



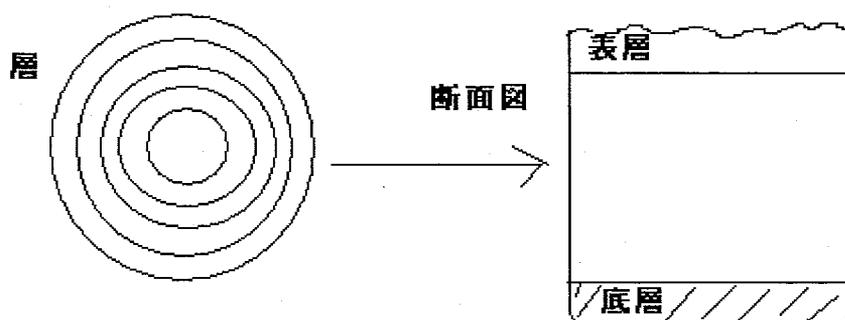
また球体として捉えたこと理由の一つとして、意識というものを「層」で捉える例が見られることについて述べる必要がある。

42 言わば取り止めのない悪夢のような不安の陰影が国民全体の意識の底層に揺曳していることは事実である  
『天災と国防』寺田寅彦

単に意識の「底」ではなく「底層」と捉えることで、地層のように層ごとの区切りができ、底部分の示す範囲が明確になってくる。これらの点より、「表面」と「底」という概念を用いたこれらの例に関しては、ステージという例で捉えるより、地球のような球体として捉え、それを断面としてみた形で説明をする方がわかりやすいと考えた。

意識を層として捉えている例については後ほど詳しく述べる。

表6 「意識を層として捉えた図」



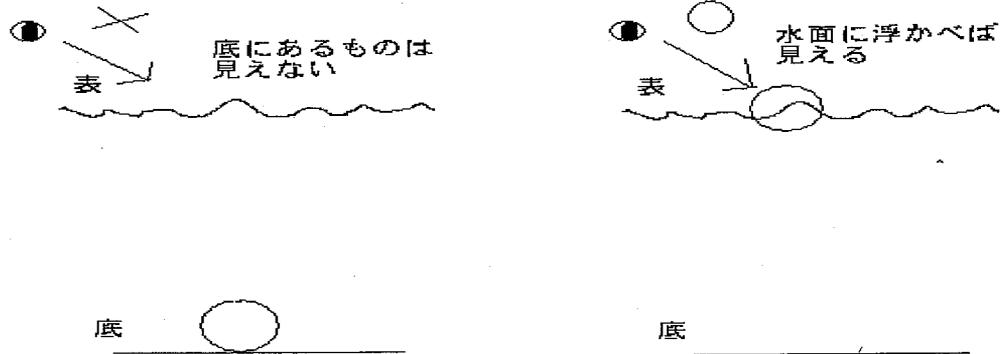
上に述べた例は、日常感じている事柄についてであったが、ここに挙げられるのは、何かを見たまたは聞いたなどのきっかけを元に浮かび上がる「情」についてである。例34は「鏡の中の光景」を見た事をきっかけに、例31も「表面へ出てくる機会」とあることから、何らかの刺激を受けた事を契機に「意識の表面に表れる」ことを示す。以下に挙げられる例はステージのプロトタイプでも考えられないことはないが、「意識の上」ではなく、「表」という場所を「面」で捉えていることからそれとは区別した。

34 自分は鏡の中のこの光景を、しばらく眺めている間に、毛利先生に対する温情が意識の表面へ浮かんで来た。 『毛利先生』芥川龍之介

31 またこの思想や感情が外界の因縁（いんねん）で意識の表面へ出てくる機会がないと、生涯その思想… 『坑夫』夏目漱石

「意識の表面に浮かぶ」または「出てくる」ということから、それらの感情は意識の底の方から上方向へ上がってくるものと認識されていると考えられる。表面を水面として捉えると、水面下は目に見えない部分でありその感情や思想が水面に現れることによって、その実体が明らかになる。

表7 「水面上で明らかになる意識」



例47 「彼の意識の水平線のすぐ下に浮いたり沈んだりしていたこの花の名が急にはっきり浮かび上がって来た。『球根』寺田寅彦」は、このような状況を顕著に表した例だと言える。

- ① 「意識の底」には「本音」が存在する。
- ② 感情は「意識の底」に混沌とした状態で存在し、「意識の表面」に浮かび上がることで、その姿が明瞭に現れる。

### 第三項 意識に浮かぶ事象 —記憶—

意識に浮かぶという表現は、「意識に上る」というものと非常に近い意味合いを持つが、それは次のような例に表れている。

63 私の意識にはこの疑問がまず浮ぶ。そうしてトルストイ翁のこれに対する答えは「人類の本務は二つに分れる。即ち一は人類の幸福の増加、他は種族の存続。・・・

『母性偏重を排す』与謝野晶子

意識に関する例文において、「上る」と「浮かぶ」の最も大きな違いは、「上る」という概念は「どこから」というスタートの部分が定義づけられていないが、「浮かぶ」に関しては「浮沈」との関連性が強く、「底」から浮かび上がると解釈されている例がいくつか見られることにある。また「底」から浮かぶと捉えた場合、それは空中ではなく水を連想させ、浮かび上がった最終地点は「表」となることより、ゴールも存在するということになる。

表8 「上る」と「浮かぶ」の差

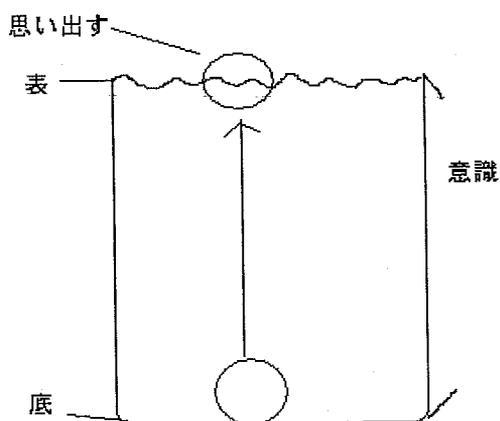


よって、「上る」と「浮かぶ」の大きな違いとは、「浮かぶ」においてはその範囲が限定されているということに見られると考える。

以下の例は、過去の経験より一度記憶している場所や思い出、物の名前など、普段は特に意識しない事柄について書かれた例である。

- 64 前から二三度僕の意識に浮かんだことのある土地会社の方へ足は向いてゐた。袋路が入って、その扉の前に僕は立つた。 『災厄の日』原民喜

表9 「意識の表面に浮かんだ記憶」



普段特に意識されない事柄が何かをきっかけに思い出される時、瞬時に鮮明に思い出せる記憶と、思い出そうとしてもなかなか思い出せない記憶というものがある。この例は前者の方であるが、「意識浮かんだことのある」ということから、それは記憶として存在はしているが、普段は記憶の底の方に沈んでいて思い出される事のない事柄として意識の中の貯蔵庫に保管されている状態であり、何かをきっかけにふとその存在を表すものであることがわかる。それでは、

簡単に思い出すことのできない記憶についてどのように表現されているか見ていきたい。

43 その時自分の意識の底層に郷里の高知の町の映像が働きかけたが、それっきり表層までは現れないで消えていた。 『三斜晶系』寺田寅彦

例 43 は、郷里の映像がこのような様子であったということは思い出したが、それをきちんとした映像として思い出すことができなかったということを示しているが、ここで注目したいのが「意識の底層」と「意識の表層」という表現である。ここでは何かをきっかけに「郷里の様子」というものを思い出しかけた、その様子を「意識の底層」にじわりと滲み出てきた記憶、更にその記憶が鮮明に映像として認識できれば、それを「(意識の底層から)意識の表層」に浮かぶ鮮明な記憶とされている。

これと関連したものとして次の用例が挙げられる。

40 こどものころにどこかであの絵を見たことがあって、その時の恐ろしい印象が、記憶の下積みになって意識の底に潜在している。 『あの顔』林不忘

この例では、その絵に関する直接的な何かが思い出されているわけではなく、その絵を見たことによって受けた印象が未だ消えることなく記憶の一部として残っていることが言える。ここでもやはり過去に受けた印象が「意識の底」に潜在すると表現されており、記憶に関わる心情が「浮沈」に関連付けられて表現されるということがみてとれる。

表 10 例 43 「意識の底層に働きかける郷里の映像」

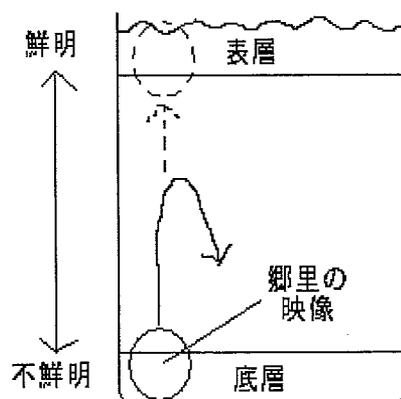
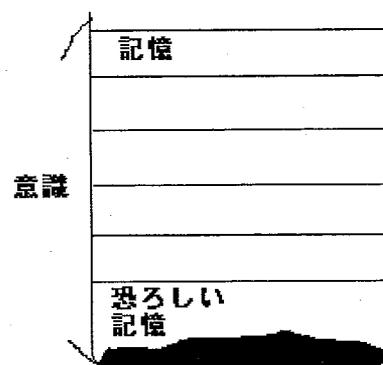


表 11 例 40 「記憶の下積みになって存在する恐ろしい印象」

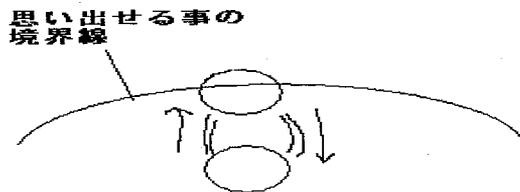


先ほども例に挙げた次の例 47 は、「ステージ」「球体」両タイプに共通した特徴をもつが、「水」に関わる概念として用いられている点よりここに紹介する。

47 彼の意識の水平線のすぐ下に浮いたり沈んだりしていたこの花の名が急にはっきり浮かび上がって来た。 『球根』 寺田寅彦

この例は水平線という境界線の上下で、思い出せることと思い出せないことを区別している例である。これも例 43 と同様に、何かをきっかけに「思い出す」という働きにスイッチが入り、その事柄が意識されるようになる。それが例 43 の「意識の底層に働きかける」ことであり、例 47 の「意識の水平線のすぐ下に浮いたり沈んだりしている」思い出しきれない記憶を指す。これらの用例では「浮かばない」と否定形で表現されているが、意識されている記憶が完全に思い出された状態はどの例にも共通するように、「意識の表に浮かぶ」と表されている。ここに見られる水平線という表現から、「浮かぶ」という概念が水に関連づけられて捉えられているということの裏づけが取れたといえよう。

表 12 例 47 「意識の水平線に浮いたり沈んだりしていた記憶」



- ① 「意識に浮かぶ」とは、事象が「表面」に表れることで明らかに映し出されることを示す。
- ② 一度記憶された事柄は「意識の底」部分に貯蓄されており、「表面」に浮かんで姿を現した状態が「思い出した」状態となる。

#### 第四項 意識の中・上

これまで意識の「表面」と「底」という、空間の上下の区切りについて述べてきたが、ここでは「意識の中」という表現より、「意識」というものの外枠にあたる境界線について触れる。ここに挙げられる「中」とは、ステージのプロトタイプにおける「中」とは質が異なり、照射を必要としていない。

13 死ぬ病人——さうした暗い意識の中に、陰気なさつきの女の顔が何時となく重なって行くのだった。 『病院の窓』 南部修太郎

15 彼の意識の中に築きかけられた美しいものが、吉川機関手の一言で崩されてしまったのだった。 『汽笛』 佐左木俊郎

12 彼らは自分が寝るも起きるも賃銀労働者であることは知っていた。けれども、それを絶えず意識の中にしっかり握り詰めているわけには行かなかった。

『海に生きる人々』葉山嘉樹

17. 母が死んだ、というようなこともほとんど忘れたようにはしていたが、次意識の中ではよほどさびしかったに違いない

『自叙伝』大杉栄

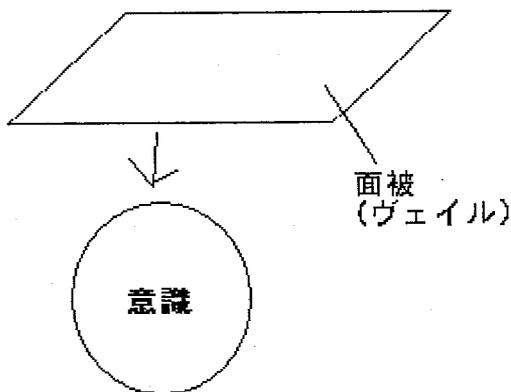
「次意識の中」という表現は、定義づけがされておらず作者の造語的要素が大きいものの、他の例と比較すると、「意識」と表現していない点、また「次」という語を使用している点では「半意識」「副意識」などと同様の扱いをすべきかと考える。

11 お前は何時もお前だ。少しも變りはせぬ。ただ、陽光と熱風とが一時的な厚い面被（ヴェイル）を一寸お前の意識の上にかぶせてゐるだけだ。

『環礁—マイクロネシア巡島記抄—』中島敦

例 11 も特殊な表現ではあるが、この場合意識の「上」といっても物理的に上下の関係ではなく、「意識」というものを覆って違うもののように見せかけているが本質的なものは何も変わっていないということを示している。

表 13 例 11 「ヴェールを意識の上に覆い被せる」



①照射、または表面に浮かび上がるなどの動きを必要としない場合、意識というものは「意識の中」と「外」との対立のみで捉えられるため、球体などの単純な枠組みで捉えられる。

以上、球体におけるプロトタイプとは次のようなものを指す。

断面的に見た場合

「底」…「日常感じている思い」「本音」などが存在する。それが「表」に出る際には「言動」など明らかな形として表れる。

「表」…「ステージ」における照射部分に対応する箇所。水面に浮かび上がることで「事象」が明らかになる。

球体として捉える場合

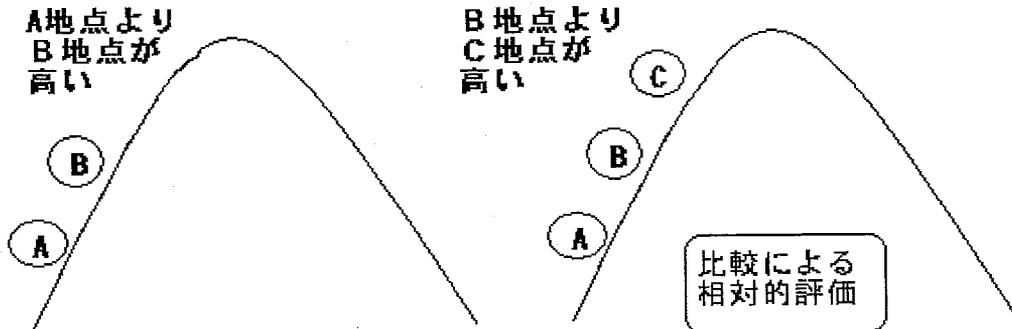
「中」…意識というものを「中」と「外」との対立で捉え、意識していること全般を総括的に捉える。

## 第二節 山としてのプロトタイプ

山のプロトタイプとして扱う例文は、「高低」の概念を有するものである。これまでの「上下」や「浮沈」とは異なり、比較を元に価値基準が判断される。初山(2003)<sup>iii</sup>では比較について次のように言われている。「人間が有する認知能力の中で最も基本的なものの一つに「比較する」という能力がある。ここで言う「比較」とは、二つ（以上）の対象をある観点から観察・分析することによって、両者の共通点・相違点を明らかにするということである。我々は日常頻繁に比較するという認知能力を行使している。（中略）なお、「大きい」と同様に比較を前提とした日本語の形容詞には、「小さい」「高い/低い」「広い/狭い」「長い/短い」「遠い/近い」「深い/浅い」などがある。」

また「意識」+「高低」の概念で捉えられるものとしてよく目にする例文は、「高まり」や「高められる」など、進行性のある表現である。登山をするとき、登って行くにつれ高い場所に位置するようになり、それに伴って全体の景色がだんだん見えてくる。それと同じように、段階によって見える景色が変わってくる事柄、または相対的に高低が評価され、周りと比較してその高さが判断される事柄というものがここに分類される。

表 14 「山のプロトタイプ」



それでは「山」のプロトタイプ在具体例を挙げる。

『広辞苑』<sup>iii</sup>による定義では「意識が低い」ことを「分別や判断の能力が劣るさま。」とされている。相対的な評価の例として次のものを挙げる。

59 だからサクラになるものは、意識の低い、普通の女工が知らずに抱いているような考えや偏見などをハッキリ知っていなければならなかった。

『党生活者』小林多喜二

この例における意識とはやや差別的な表現ではあるが、身分の低い人間が抱いている一般的な考え方や偏見などを「意識の低い」つまり次元の低い考え方として捉えている例である。ここで言われている「サクラになるもの」とは、女工よりも意識の高い人間ということになるが、山の少し高い位置から彼女らの行動を見渡し、彼女たちが無意識に抱いている考えや偏見なども十分知ったうえで、サクラとして振舞わなくてはならない状態であることを示している。

表 15 例 59 「意識の高低の相対的評価」



このように、「山」のプロトタイプに関しては、比較という作業の下に「高低」が段階的、または相対的に評価されるものであるといえる。

## 第一項 意識の高低

### 1. 自覚

- 54 しかし座談会の話をも、意識的な労働者が自身に必要と感じているのは、労働者階級としての意識のたかまりであり 『その柵は必要か』 宮本百合子
- 55 労働階級者の意識のたかまりと組織の成立とともにプロレタリア文学運動が進出するにつれて、 『婦人作家』 宮本百合子
- 57 五ヵ年計画の実践をとおして、階級意識を一層たかめられたソヴィエトの勤労人民は、マヤコフスキー派の、言葉の英雄主義では満足しなくなった。

『ソヴィエト文壇の現状』 宮本百合子

これらの例においては作者に偏りがあるので、個人的にこの言い回しを好んで多用しているという可能性も考えられるが、自身の立場を強く自覚するという意味で「意識が高まる」または「たかめる」と表現されている。

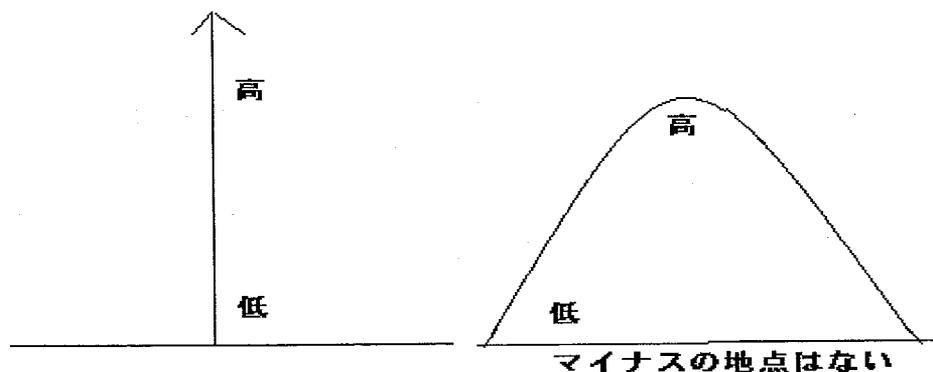
一方、「意識」＋「低」の概念の組み合わせでは、次のような例が挙げられる。

- 60 これは文化の生産者の方から見たことだが、もっと意識の低い大衆殊に、農村の婦人大衆に向かってソヴィエト映画が文化啓蒙の役割を  
『ソヴィエト同盟の芝居・キネマ・ラジオ』 宮本百合子
- 61 世界じゅうのどんな意識の低いプロレタリアートでも、彼がプロレタリアートならやきつくように知っている。  
『なぜソヴィエト同盟に失業がないか?』 宮本百合子
- 62 現在の肉類の欠乏は、五ヵ年計画のはじめ、集団農場化が行われるとき、階級的意識の低い中農や反革命的な富農が、家畜の共有を嫌がって非常に多くの牛、馬、豚を屠殺した  
『ズラかった信吉』 宮本百合子

これらは「意識」＋「高」の対義語にあたるものであり、「意識が低い」とはつまり自覚があることにはあるが、極めて弱い状態であることを示す。これらの例について注目すべき点は、「意識」というものを縦軸で考えた時、ゼロの状態が一番下のレベルであり、意識が低いという状態は、「自覚している状態」つまり、プラス方向にあると考えられる。前述した「意識が重い」の例では対義語は「軽い」であり、完全に意味も対極になるが、今回の例の場合、意識が低いという表現は「高い」という語の対極にはならない。意識を高さのあるものとして捉え、相対的に見て「低い」か「高い」かその程度が判断されるものである。つまりその意識というものが限りなくゼロに近い状態であっても、当人は自身の立場を自覚していることが前提として、このように表現されているこ

とになる。

表 16 「意識の高低」



## 2. 関心

55 他人の原稿を編集するうち、児童文芸への意識が高まっていく。

『星の銀貨』作者紹介 楠山正雄

「意識の高まり」という例は、主に自身の「社会的な立場」を自覚していることの例として挙げられてきたが、今回の例の場合は、「児童文芸」というものへの関心が高まっていることを示す。これも「意識」＋「高低」の用例について述べたときに既に触れている点であるが、「意識が高まる」という表現の始まりはゼロではなく、元々意識していた範囲内のものうち特に関心を高められたものに対してこのように表現する。またこの「高まる」という表現は、「ステージ」や「球体」のプロトタイプでは説明できないある特徴をもつ。

58 あいつは自分の華々しい成功に浸りながら、その意識をもっと高調させるために、俺を傷つけてみたくなかったのだ。

『無名作家の日記』菊地寛

「高まる」または「もっと高調させる」など、動作が進行する特徴は「浮かぶ」という表現にも一部共通する点がある。しかし「浮かぶ」という動作は、「表面に」という行き先の制約がある限り、それ以上上に行くことは不可能である。つまり「浮かぶ」動作は、「底面」から「表面」までの限られた範囲の行動に留まると考えられる。一方「高まる」という語は相対的な評価であることは前提にあるが、終点はなく無限に上方向へ上がっていくことが可能であると考えられる。この特徴は、次章の「テンションが高い」という表現についても一部同じことが言える。

- ① 「高低」の価値基準は比較を下に相対的に判断される。
- ② 「意識が低い」という評価は、「意識が高い人間」との比較により表れるものであり、「意識がない」などのゼロ以下の評価にはならない。  
「上る」「浮かぶ」などはゴール地点となる目的地を有するが、「高まる」という表現には際限がない。

- 
- i 「半意識の下で」⇒「なかば意識の下での意か。漱石は潜在意識の意味で、「副意識」の語をよく使用する『日本近代文学大系 26 夏目漱石集Ⅲ』角川書店 (p 348) より。
  - ii 朮山洋介(2003)「認知言語学における語の意味の考え方(特集 形式文法と機能文法)」『日本語学 22(10)(通号 269)』収載 (p 74~82)
  - iii 『広辞苑』CASIO 電子辞書 E X - word

### 第三章 日本語の心情表現を基礎に用いられる外来語

#### 第一節 「テンション」英語における用法との相違

『ロングマン現代アメリカ英語辞典』<sup>1)</sup>によると、「Tension」とは次のように定義されている。

##### **Tension**

##### **1. no trust:**

The feeling that exists when people or countries do not trust each other and may suddenly attack each other or start arguing.

◆ Tension in the region has grown due to recent bombings.

◆ Racial tension

◆ The conflict is typical of the tension between developers and residents.

##### **2. nervous feeling:**

a nervous worried feeling that makes it impossible for you to relax.

◆ The room was filled with tension as students waited for the test to begin.

##### **3. different influences:**

a situation in which different directions and make the situation difficult.

◆ Dan struggled to reduce the tension between work and family life.

##### **4.tightness: tightness or stiffness in a wire, rope, muscle etc.**

◆ Often a hot bath will help relieve muscle tension.

◆ There is a lot of tension on the wire.

##### **5.force: the amount of force that stretches something.**

◆ The rope can take up to 300 pounds of tension.

上記1では、国家や人種間などお互いに信頼関係がなく、一触即発の緊張状態であることを示している。また、2の心情を表わす用法としては「テスト前の緊張感」などを指す。ここには「高低」の概念と共に用いられる例文は見られないが、英語におけるテンションの実例として、次のようなものが挙げられる。

" Tension is high in the state capital, Yenagoa, with rival groups marching in favour of and against the governor."<sup>ii</sup>

この例における「Tension is high」とは、国内におけるグループ対立の激化を「緊迫状態が高い」として表しているものである。

「ハイテンション (high tension)」をそのまま英語として用いた場合、この表現がどのように解釈されるかということについて英語のネイティブスピーカーに聞き取り調査<sup>iii</sup>を行ったところ、「二本の支柱のうち一方にのみ圧力がかった状態」または「肩こりのひどい状態」などを連想する。または新聞記事において「tension」または「high tension」とは主に国同士や派閥争いなどの対立による「緊迫状態」を指すが、心情を表す際に「高低」の概念を用いる事はないとの回答が見られた。

『ジーニアス和英辞典』<sup>iv</sup>では、「テンション (tension)」とは次のように定義されている。

テンション tension (名詞)

1. 《正式》ぴんと張ること、伸ばすこと、伸張；張った状態；張りの度合；  
〔物理〕(膨)張力；蒸気の圧力

**用例** Too much ~ will break the string. あまり強く糸を引っ張ると切れる。

2. (精神的な)緊張、不安；[通例～s]〔個人・国家間などの〕緊迫状態  
〔between〕

**用例** Mental and physical ~s are both running high.

精神的、肉体的緊張が両方とも高まってきた。

3. [電気] 電圧 (voltage)；電位差
4. (ミシンの糸の張りを調整する上糸調子調節装置
5. (編み物の) 編み目の詰み具合
6. [文学] テンション 《主に詩における対立[矛盾]する要素の緊張》
7. 筋肉緊張《疲労・苦痛の原因となる》一動(他)・・・に張力をかける、・・・  
をぴんと張る

**用例** To relieve ~ in your neck, slowly turn your

head to the right and left as far as possible.

首の張りをほぐすには頭をできるだけ左右に大きくゆ  
っくりと曲げなさい。

上記1. 2. の意味として用いられる例<sup>v</sup>を挙げる。

- ・ 「精神の緊張(テンション)」堀田善衛『記念碑』1955/『文芸春秋』1956.10/  
『週刊新潮』1957.9/
- ・ 「テンションの民族と言われるのは、感傷におちいりやすい危険をも意味してはいないだろうか」『中日(中里恒子)』1960.9.14/
- ・ 「日本民族は天孫民族といますが、実はテンション(緊張)民族です」  
『毎日(浅賀ふさ)』1961.2.3(著者注:テンション民族とは天孫民族のもじりで、ユーモアを解せず、緊張しやすく、好戦的であることの意を寓す)

これらの記録より、1950年代には既にテンションという英語が「緊張」という意味を持って日本語の中に受容され使用されていたことが窺える。ところが今現在、この「テンション」という語は、「緊張」というよりも、主に「心理的な高揚状態」を表すものとして用いられ、それらは「テンションが高い」「(高い)テンションを維持する」など、「高低」の概念と共に用いられる傾向にある。

『知恵蔵』『イミダス』『現代日本語の基礎知識』などの主要な情報系辞書では、「緊張・緊迫状態」との意味で「テンション」を定義づけてられていたが、それに加えて「テンションが高い」「テンションが低い」との用法を定義し扱っているのは『現代用語の基礎知識』のみ、2001年度版以降であった。次のように記載されている。

テンション高い 気分がハイになっている。盛り上がっている。

テンション低い 元気がない。(気分が乗らないvi。)

同書では流行語、または若者言葉として扱われているが、これらの表現が2001年度以降掲載され続け、またその意味の記載が多少増えている点からも、日本語として広く浸透しつつあることが窺える。

「テンション」という語が日本語に取り入れられて少なくとも半世紀以上、この外来語は元の意味範疇から外れた使用方法として日本語の中で新たな派生を見せているといえる。さらにこの語を「心情表現」として新たな日本語に加え、日本語における心情表現と同等に扱っていることが現実に行われている。日本語の中に外来語を受容する際には単語だけ取り入れて、それに付属する英語的な概念は切り捨て、日本語の用法として再構築し用いるという傾向を逆手にとり、日本語母語話者が本質的に持ち合わせている言語感覚を追究するための材料としたい。

## 第二節 テンションと上下の関係

「テンションを上げる」という表現については、辻(2003)<sup>vii</sup>に文法の見地より日本語で一般動詞から、補助動詞に文法化されるケースの例として挙げられている。

- (56) a. 頭を上げる。
- b. 会場のテンションを上げる。
- c. 原稿を上げる。

(56a)のように、〈文字通りの意味〉としては、空間的な鉛直方向への移動(運動)を指すが、(56b)のように、抽象的な次元でも用いられるようになり、(56c)では、「終える」ないし「仕上げる」の意味に転義することは、経験基盤主義的な動機づけがある。具体的には、「物が積み上がっていくことで、終わりにいたる」という経験側であり、例えば、風呂に湯を入れていけば、下から上へと水位が上昇し、適当なところで上昇が終わるか、あるいは水が溢れるという形で上昇が終わりにいたることを経験的に知るといえるものである。このように、(56a) (56b) (56c)に隠喩的な写像があるだけでなく、次のように、動詞「上げる」が複合動詞ないし補助動詞として用いられるときと並行的に観察される。

- (57) a. 空を見上げる。
- b. 会場を盛り上げる。
- c. 原稿を書き上げる。

(57a)は複合動詞の後項として空間的な物理的な移動(運動)を表し、(57b)は抽象的な変化を表している。また、(57c)は、補助動詞として「終える」の意味を表しており、これらの例から、(57a) (57b) (57c)に隠喩的な写像があるだけでなく、(56)から(57)にかけても、並行的に隠喩的な写像が認められる。

この論を整理すると、次のような図になる。元になるものから意味が拡張したものの方向を矢印で示している。

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 1. 頭を上げる        | 目に見える物理的移動                                     |
| ↓               |  |
| 2. 会場のテンションを上げる | 物理的な上下方向の移動は見えないが、目に見えてわかる会場の活気より判断する「上下の価値基準」 |

まず、「頭を上げる」という表現が空間的な移動（運動）の方向を表すことは、経験上容易に理解できる。それでは、それが抽象的概念として用いられるようになったとされる「会場のテンションを上げる」という表現については、「上下」の基準はどこで判断されるかという、「場の雰囲気」によるものである。会場内で人々が「笑う」「発言する」「体を動かす」「拍手をする」など具体的な行動をした結果、それが「テンションが上がった」もしくは「盛り上がった」状態として認識されることになる。つまり、会場が活気づいた状態（動）は「上」方向、静まり返った状態は（静）は「下」方向という判断がなされていることになる。この価値基準はどのようなものに起因するのであろうか。

池上（1978）<sup>viii</sup>では、「具体的（つまり、感覚的に捉えることが可能）なものに対して用いられた表現が抽象的なものごとに転用されるというのも、一般的な変化の方向である」として、次のような例が挙げられている。

「山ガ高イ」に対して「値段ガ高イ」、「水ガ深イ」に対して「読ミガ深イ」、「花火ガ上ル」に対して「評価ガ上ル」など、〈具体的〉なものから〈抽象的〉なものへという意味変化の方向も、やはり人間の心理的な傾向に根ざしているのではないかと思われる。幼児の言語習得の場合にも、まず習得されるのは直接身の回りのものとして感覚的に捉えられるようなものごとを表している語であるし、一般に抽象能力の発達は年齢が増すにつれて見られるということもある。それと同じような傾向が言語変化の場合に認められたとしても、それほど不思議ではないわけである。

ここに言われるとおり、「山が高い」ということは、「登るのが困難である」ということに共通して「値段が高い」＝「入手しにくい」という概念に転用される。「水が深い」とは「底が見えない」ことに共通して「読みが深い」＝「思考が単純でない」という意味に転用される。「花火が上がる」ということに関しては、物理的に上方向に向かうことに加え、「上がることで喜ばしい結果が見える」という心理的作用が「評価が上がる」という抽象的表現をプラスと評価することの上に働いていると言えるだろう。

つまり、「上下」の価値基準は身近にある具体的な概念をどのように捉えているかという判断の結果表れる。「会場のテンションが上がる」という表現を図にすると次のようになる。

基本的に「山のプロトタイプ」と同じだが、「低い」という領域がゼロ値より下となることに違いが見られるため、「山」ではなく軸状で表す。

表1 「会場のテンション高低・上下の位置関係」

高  上 ↑  0 ↓  下  低	動  ・拍手がわきおこる ・発言 ・歌う  平常値  ・静まり返る ・眠る ・しらげる (ただし集中してしんとすることは含まれない)  静
---	--

テンションが「上がる/下がる」という概念と結びつく時、上下の関係は、対極となる。「会場のテンション」と限定した場合には、ゼロの状態を基準値として、上方向に進むほど「動」のレベルが上がり、会場の人々の動きが見られるようになる。一方下方向に進む場合には、「静」の要素が強まり、「会場が静まり返る」または「人々が集中していない状態」となる。大きな声を出すことや、発言する事を「声を上げる」といい、逆に声を小さくすることを「声を落とす」というように、また、「ボリュームを上げる/下げる」というように、音に関わる慣用句には「上」方向は「大」、「下」方向は「小」という位置付けが見られる。「テンション」と「上下」の方向のつながりには、視覚または聴覚から得る情報を、空間的に位置づける流れをくんでいる様子が窺える。

### 第三節 共感覚の視点から

テンションを空間上に位置づけようとする働きには共感覚としての一面が窺える。

それでは、「テンション」の実例を挙げる。

- 1 「(夜中に公園内を車で暴走する若者に、「騒音についてどう思うか」というインタビューに対する回答)「ええんちゃう？テンション上がるし」
- 2 「エジプトで合流する時にピンクのワゴンの窓からズラが見えた瞬間、一気にテンション上がりました！」
- 3 「あたし部屋から変えていこうと思って。ピンクにする。テンション上げていこうと思って。」

この場合における「テンションが上がる」とは、「気分が盛り上がる」という

意味で用いられている。「上下」が対極となる「テンション」の軸上に、「気分」という抽象的なものをアップダウンで表すことで、空間上の位置付けを求める事ができ、結果具体性を持たせることが可能となる。森田 (1996) ixでは、「情意的共感性からの連想」について次のように述べられている。

形容詞・形容動詞は、その意味からして、主体自身もしくは対象への感覚的判断に頼る面が強い。そのため、感覚や感情の内容を拡大使用ないしは転用する例がしばしば見られる。たとえば「あたたかい」は温度形容詞として「暖かい飲み物」「温かい部屋」のような温度を問題とすることの出来る名詞と結びついて、そのものの状態説明を行うわけである。属性形容詞であれば当然、属性主になり得る事物の範囲というものがあり、語彙結合における選択制限をなすわけである。それを犯して「温かい家庭」だとか、「懐が暖かい」などと言えるのは、あたたかさに対する感覚的ないしは情意的な共通性を「家庭」や「懐具合」に見て取ったからに他ならない。本来性格を異にする他の対象の現状に、感覚的な共通性を見だし、あくまで共感的な意識として、異なる状況描写に用いるべき形容語を応用したものだと言ってよい。いくつか例を挙げておこう。

「熱い仲」「甘い言葉」「資金繰りが忙しい」「おとなしいデザインの服」  
「黄色い声」「冷たい性格」「話が生臭くなってきた」「神経が太い」「食が細かい」

「テンション」を形容詞で捉えた例は、4「なんか急にテンション高くなったりして」の例などに見られるが、この「テンションが高い」という表現は「神経が太い」の例と共通し、心情または性質を視覚的に形容しているものである。テレビの番組上、テロップなどでよく見られる「テンション↑(テンション上がるの意)」などの、記号を使用した表記などは、正に心情を視覚的に捉えようとする動きの現れであるといえよう。

「百聞は一見にしかず」とはよく言うように、物事を視覚的に捉えるということは、必要な情報を端的にまた簡潔に捉えることを可能にする。「テンション」と「上下」の位置付けには、このような視覚効果を求める共感覚の作用が働いていると思われる。

#### 第四節 テンションの価値付け

「テンション」を意味の観点から考察すると、この語はゼロや下方向に位置するよりも、上方向にあることが好ましいとされている文例が見られる。それ

は次のようなものである。

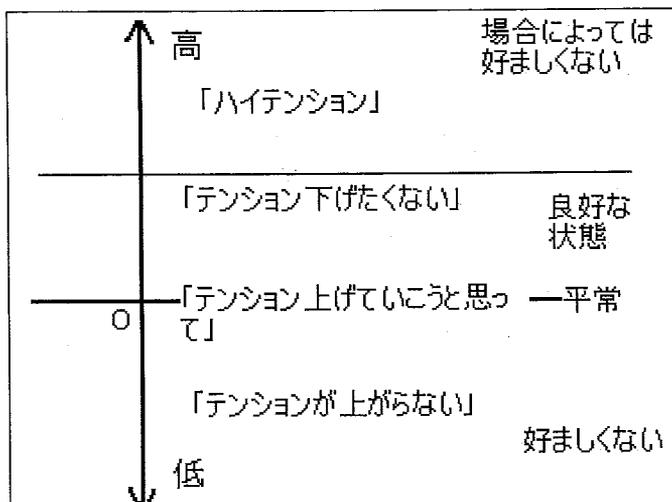
- 5 「そんなことでせつかくの誕生日をテンション下げたくない
- 6 「カメラの向こうにオカンがおると思って」「テンション下がるわホンマに」
- 7 「テンションが上がらない。怒濤の勢いでアップしてから...イマイチテンションが上がりにません。」
- 8 「12月24日 テンションが上がらない ストーブのおかげで、だいぶPCがやりやすくなった。... けど、微妙に暖かいせいでテンションが上がらない・・・。

上の例のように、「テンションが上がらない（それにより困っている）」という例は見られるが、「(上がった) テンションが下がらず困っている」という例は見られない。これにより、「テンション」とは、上方向は「やる気がある状態」「活気がある状態」であることを示し、下方向はその対極であると解釈される。また、「上がる」「下がる」など「上下」の移動の動きが見られることから、常に動いているものであり安定はしていない状態のものであるということを示している。「気分」という移ろいやすいものを適格に表現するため、言語上で「上下」自由に行き来できる状態であることが必要であったと思われる。

表現としては「テンションが上がっている」「テンションが高い」「ハイテンション」は同等のレベルで捉えられる。

- 9 「蛇川さんはかなりハイテンションでした。」

表2 「テンション+「上下」「高低」の表現における価値付け」



しかし、「テンションが上がりきった状態」が常に好ましいとも限らず、場合によっては「テンションが高い」人間が悪い意味として取られる場面もあることは述べて置く必要がある。

鈴木（1973）\*には日本語における形容詞の5種の基準を定義している。

- (1) 種の規準      (2) 比較規準      (3) 期待規準
- (4) 適格規準      (5) 人形（ひとがた）の規準

これについて森田（1996）\*では次のように述べている。

鈴木氏の説明によれば、

- (1) その対象の種の、平均的スケールを基準としたサイズに対する判断「このリンゴは小さいね」など。
- (2) その特定対象のいくつかの性質・側面における相互の対比の上での釣り合い上から下す判断。「幅の割に細長い紙」など。
- (3) 予想や期待のレベルを基準として、対象の現実に下す判断。お小遣いをねだって「なーんだ、少ないなあ」と言うのなど。
- (4) ある目的や用途を規準として、その対象がその基準にかなうかどうかを見る判断。「このホールは、パーティー会場としては狭い」など。
- (5) 人間を基準に据えて、対象の属性をそれとの比較のうえで下す判断で「象は鼻が長い」など。

もちろんここで鈴木氏の述べている基準の範囲は、「かくれた規準」と氏も言っているように、形容詞で判断を下すときの話者の意識として認められる心理的な基準を取り上げたものである、だから、お小遣いの額を友達と比較して「なーんだ、少ないなあ」と言うような場合は「単なる明示的な比較にすぎない」と氏は述べている。

ここに言われているとおり、形容詞をもって人が表される場合には時や場面など環境によってその評価は左右する。例えば上記（1）や（3）の例などに当てはめた場合、（1）パーティー会場で一人だけテンションが低い/高い（3）渡したプレゼントが思いのほか喜ばれなかった場合などには、「相手のテンションが低かった」となるなど、「テンションが高い/低い」という形容詞も、これに該当する。

以上「テンション」+「上下」「高低」の概念が表す意味内容について述べてきたが、「気分」という目に見えない概念に価値付けを行った結果、例3「テンション上げていこうと思って」などのモチベーションのコントロールや例10「そのテンション維持してね」といったような指示を与える表現をも作り出すことが可能となった。「テンション」という語に関しての「高低」「上下」の概

念が持つ方向性にその特徴が表れている。

森田（1996）<sup>xii</sup>では「方向性の関係」として「方向性に根ざす語彙には、指示内容そのものが客観的に 180 度の方向差に基づく語同士である場合と、指示内容、指示対象の実体とは関係なしに逆方向のものとして対比する概念上の対義語と、2 種類がある。（中略）客観的な逆方向の反義語には、方向そのものを表す「南/北」のような名詞と逆方向への移動「上る/下る」などの動詞が、その主なものである。」と述べている。

この逆方向の反義語を日本語における心情表現に用いた場合、次のように反対概念をそのまま用いては対義語として成り立たない表現がいくつか挙がる。

○気分が高まる      \*気分が低まる

○気分が盛り上がる      \*気分が盛り下がる

しかし、「テンション」という概念においては、「上」と「下」「高」と「低」がそれぞれ対極に向かい、反義語として意味上の固定を示している。「テンション」という語が「気分」の概念の代用として用いられ、これほどまでに使用頻度を高く保っている背景には、「応用のききやすさ」「感情を端的に言い表せる利便性」などの事情が上げられると考える。「テンション」という語が「気分」の概念として表されるようになったことの事情については結論に至らなかったが、日本語として根付き新たな意味の派生を初め、日本語母語話者の言語感覚によって用いられているという事実がここに明らかとなった。

---

i 『ロングマン現代アメリカ英語辞典』CASIO 電子辞書 EX-word

ii ニュース見出し <http://news.bbc.co.uk/1/hi/world/africa/4478646.stm>

iii 英語のネイティブスピーカー      アイルランド、アメリカ、カナダ出身者、日本在住歴 2 年以下の 20 代 4 名を対象に聞き取り調査を行った。

iv 『ジーニアス和英辞典』CASIO 電子辞書 EX-word

v 荒川惣兵衛（1967）『外来語辞典』角川書店

vi 「気分が乗らない」の記載は 2003 年度初出。

vii 辻幸夫編（2003）『シリーズ認知言語学入門（第 1 巻）認知言語学への招待』大修館書店収載 菅井三実著（p 175～176）

viii 池上嘉彦（1978）『意味の世界 現代言語学から視る』日本放送出版協会（p 139）

ix 森田良行（1996）『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房（p 39）

x 鈴木孝夫（1973）『ことばの文化』岩波新書

xi 森田（1996）同上。（p 124）

xii 森田（1996）同上。（p 209）

## 結章

本論文は次のようなことを目的に研究をすすめてきた。

- ① 日本語の心情表現において用いられる「高低」「上下」などの概念は空間上どのように位置づけられているか、またどのような形として捉えられているかということについて明らかにすること。
- ② 日本語における「心情」+「物理的概念」の組み合わせに規則性を見出す。また意味論上の区別としてそれらを系統別に整理する。
- ③ 日本語に受容された英語が日本語の心情表現として用いられる際に「高低」や「上下」の概念と共に表される必要があった背景、またはその必然性を明らかにする。

日本語話者が空間の認知能力を言語に適用する場合、たとえ英語を受容し用いた場合にもその名残は現れる。本稿のもっとも大きなテーマの一つとして話者が意識せずして使用しているこの認知能力というものを形として明らかにすることを目標とする。

### 第一章 ステージとしての意識

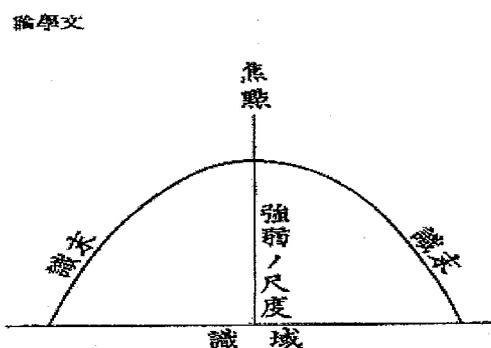
日本語における「意識」とは心情を表す抽象的な概念であり物体として目に見える形で存在しないものであるが、言語上では「意識の上」「意識下」など、「意識」という概念を空間上に位置づけようとする様子が窺える。

この章では、意識というものを一つの「場」として捉え、その「上下」の空間を用いた例を基本に、「意識」がどのように形作られ、捉えられているかということについて下の図を用いながら述べた。

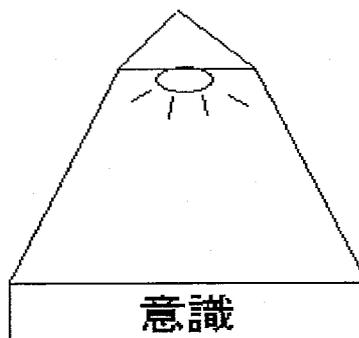
表0 夏目漱石作 「意識の図」

表1 「ステージのプロトタイプ」

『文学論』より



夏目漱石作



著者作

## 第一節 意識の上

第一節では、「意識の上」と表記されている文例について扱った。「意識の上」とは、図でいうステージ上を指す。

### 第一項 自覚

ここでは、自覚の意味を有する「意識」の用例について述べた。

「意識の上に立つ」という表現には、例えば現在地は上から見た図でしか確認できないように、敗北の原因をつきつめるためにはまずステージに上がり全体を見下ろす必要があり、更にそこに立つことでその場を制し、踏みしめることで新たなステップへ向かっていこうとする姿が描き出されている。「自覚としての意識」が上の概念と共に表現される理由は、「意識」というものを視座や立脚点として「ステージ上」に捉えていることに起因する。

### 第二項 記憶

#### 1. 映像

ここに挙げられるのは記憶のうち、映像として思い描くことのできるものについてである。

「思い描く」または「思い出す」というプロセスにおける「意識」とはステージ上でライトの照射をうけることでその姿に具体性を持つようになると考えられるが、忘却される事柄とは、ステージ上で中心部から端に移動することでライトの照射が弱まり、薄暗い中でその姿が見えにくくなっていく様子を示す。

また次の「スペクトラを退治した写象なども無論意識のうへのぼつて来なかつたのである。」との例より、意識の上部分では「明瞭」な映像として描き出されるが、下部分は「不明瞭」な状態であることがわかる。このことより、一度目にしたことのある事柄、またはイメージできる映像とは、意識の下部分に不明瞭な状態で貯蓄されており、上方向に上ることによって具体性を帯びていくものと考えられる。

#### 2. 過去の記憶・新たな記憶

意識上の照射される部分にある事象は記憶として存在し、光の当たらない部分にあるものは記憶にない事柄となる。つまり照射範囲の境界が記憶と忘却のボーダーラインとなる。ここではその境界線を「意識の端」と表現しているが、新しい記憶が入ることによって記憶の中心部（ライトの真下）は更新され

ていき、古い記憶は端へと押しやられていく。ステージの「上下」もしくは「昇降」の観点で表されることに加えて、「記憶」はライトの照射範囲をもって「覚えていること」「忘れていること」を表示し分けることができる。照射される部分を強調することで、影=unconsciousの部分が表現されること、また、意識の「端」と表現されることより、領域性が浮かび上がる。

また「記憶」とは過去のことを示すのみではなく、これから新たに記憶されるものをも指す。「意識の上に入る」と表現されることから、意識が領域性のあるものとして捉えられていることがわかる。漱石は意識の縦軸上で意識の強弱を表していたが、この例に挙げられているような「新しい情報」とは、意識というステージの上部、更にはスポットライトの真下あたり最も照射の強い場所に位置するものと考えられる。

以上のことより「意識の上」について次のようなことが言える。

- ①「意識の上」には「把握できている事柄」「明瞭な自覚」が存在する。
- ②「意識の上」では「映像」や「記憶」を明確に復元、または作成できる。
- ③「意識の上」=ライトの照射範囲であり、「古い記憶」はライトの照射範囲外に寄っていき、ステージ上から落ちた記憶は「意識の下」部分に貯蓄され、必要に応じて意識上へ上る。

## 第二節 意識の下・意識下

「意識」+「上」の概念の組み合わせが、意識というものを自身が制していく意味合いを持つのに対し、「意識下」とは、自身が意識というものにコントロールされている印象を受けるが、それは「～下」という場所に位置することで、その支配や影響を受ける立場に置かれると認識されることに起因する。

### 第一項 職業意識

「意識の上」という表現が、自身が感情を踏まえた上で自発的に行動するという印象を与えるのに対し、「〇〇意識の下」とはその「意識」というものに自身がコントロールされている印象を受ける。つまり、職業を意識することにより、その意識が自身をそのような行動へと導く、と解釈される。

図の上では、意識が頭上にあることにより、その意識の制限を受ける状態があると捉えられる。

### 第二項 無意識

「意識下」の説明として「表に現れない部分」とあるように、「自覚されない事

柄」が存在する。

「意識下」という照射されない範囲が、未知の領域であること、または自身の知りうる範囲を超越した力と捉えられていることより、自身の関知しない意識の場所として「無意識」と言い換えて解釈することができる。

「何物をも聞くまいとする。又意識の上でも、いつも自分が聞き馴れた祈祷の詞を聞いたり、又繰り返して唱へたりする時、…何物をも感じまいとしてゐる。」

上の例のように照射される場所としての「意識の上」で自身の判断による決意がなされていることと対比させると、その差は明らかである。

以上のことより、「意識の下」について次のことが明らかとなった。

- ①「〇〇意識の下」とは意識によって自身がコントロールされること。
- ②「意識の上」が自覚のある部分ということの対比として、「意識下」は「無意識」の領域、または本人の感知していない「未知の領域」を示すものであること。

### 第三節 意識外

「無意識」に関連して、「意識外」と表わされる例について述べる。意識の領域性については「意識の中」という例より既に述べてきたことであるが、この「意識外」との表現の存在により、照射範囲の境界がより強調される。

#### 第一項 無意識

「意識外」という例に共通することは、「自覚なくして何か行動をしている」ことである。「意識下」における「無意識」の例との共通性も見られるが、「支配」や「影響」などの力によるものではないという点で区別される。ここに見られる例における特徴として注目すべき点は、ステージ上におけるライトの照射範囲の問題である。

ステージ上でライトを浴びている事象が、「意識される事柄」であることを前提にした場合、その照射範囲から外れた事象は「自覚しない事」や「忘れられた事」となる。「中」と「外」とを対比させることにより、照射範囲の境界線が明確になり、視覚的に「意識の中」と「意識の外」を区別する事を可能にしている。

以上のことより次のことが明らかになった。

- ①意識外とは「無意識」の領域を示す。
- ②意識する必要のないものをステージ上から意識外に出すことで、「無関心」の

領域に押し出せる。

- ③「中」と「外」の対比により、境界線が明らかとなりその部分が意識の端と認識される。

#### 第四節 意識に上る事象

「意識」に関わる空間的概念として動詞、「のぼる」または「あがる」と表される用例について触れる。

「意識に上る」とは何かをきっかけに「意識下」に存在していた事柄が「意識」のステージ上へ上っていくことによって「自覚」または「認識」する状態へと近づいていく様子を表す。更に付け加えるとこの「上がる」という概念は、「意識しなかったことを意識するようになる」という心情変化の様子をステージの下からステージの上への物理的移動として捉えることにより、「無意識」から「意識される状態」へ、または「混沌とした状態」から「明瞭な状態」への移動を具体的に表そうとする様子が窺える。

#### 第一項 思考

何かをきっかけに自動的にステージ上へ上ってくる「思考」や「疑問」なども「意識に上る」と表現される傾向にある。思考や疑問などは「考えよう」とする意識なくして自動的にステージ上へ上るものであるが、それは「上す力が不足している場合」または、「ステージ上が他の事で埋め尽くされている場合」には機能しないということがいえる。

- ①「意識に上る」とは何か外部からの刺激を受けたことをきっかけに、事象が「無意識」「無自覚」の下部分から上方向に上り、意識されるようになる。
- ②「意識上」が何かで一杯になっている状態の時、また「上す力」が不足している場合「意識に上る」という動きは機能しない。
- ③「意識に上る」事象とは、考えようとする思考とは別に自然に浮かぶ「疑問」などを指す。

以上のことより、「意識」におけるステージのプロトタイプ次のようなものを示す。

ステージ上・・・ライトの当たる範囲。ライトの下部分が最も照射が強い。「自覚している事柄」「明瞭な記憶」

ステージ下…ライトの当たらない部分。意識にコントロールされる。

「無意識」「不明瞭な記憶」本人の関知しない「未知の領域」

ステージ中…ステージ上、照射範囲内を示す。

「自覚している事柄」ステージ端部分に存在するものに関しては照射が弱く、「おぼろげな記憶」を指す。

ステージ外…ステージ中と対比して、照射範囲の境界から外を指す。

「無意識」または「無意識のうちに起こす行動」が存在する。意識的に気にとめない事柄も指すので「無関心」も含む。

## 第二章 球体、山としての意識

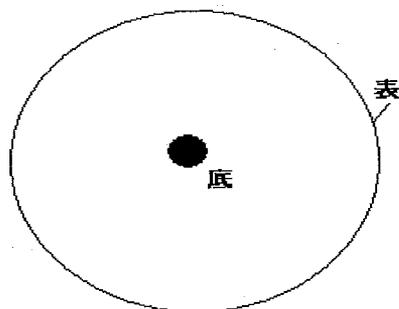
「意識」とは「ステージ」以外に「球体」と「山」計三つのプロトタイプで捉えられる。この章では「ステージ」のプロトタイプに合致しない例を扱った。

### 第一節 球体としてのプロトタイプ

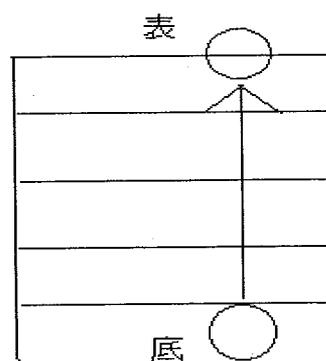
ここでいう球体とは、地球のような形をした容積のある立体であり、中心部が最も深い「底」の部分であり、表面はどの方向から見ても表であると認識されるものである。

また、球体を断面的に捉えた層状のものを球体の一部とする。この図における「表」に何か事象が表れた状態は「ステージ上」の照射とほぼ同義であるが、「底」「表」などの表現を忠実に捉えた上で区別し、ここではこれらをステージの例外的プロトタイプとして扱う。

表1 ①球体のプロトタイプ



②断面図



### 第一項 意識の奥・意識の軽重

例文の中には、「意識の奥」や「意識が重い」などがみられるが、これらの

表現より、意識というものが「上下」の概念以外にも、「奥行き」また「重量」を持つものとして捉えられている事がわかる。ただし、この場合意識の軽重とは、意識というものの全体が人間の体の中で下方向に沈んだり、上方向に浮いたりする様子として捉える方が自然と考える。

「上下」の概念との関わりを持たず、またライトによる照射を必要としないこの例は、ステージのプロトタイプによって説明をする必要がないとみなされる。よって、球体のプロトタイプとして捉える。

「いつも病気をして、母にお手数をかけているという意識が胸の奥に、しみ込んでいるせいでもあろう。」

上の例には、母に対する思いを含んだ意識が胸の奥に存在するとある。ここに挙げられる球体という形は、日本語の上で認識されている「心」というものに一番近い形のように思われ、これらをつきつめていくうちに日本語母語話者がどのような物事を「心」で考え、またどのような事象を「頭」で考えるかということにつながっていくと思われる。

## 第二項 意識の表面・底 —感情—

意識が「表面」と「底」で表される傾向より、「地表と地底」もしくは入れ物状の形態として捉えられ、その間を感情が行き来すると考えられる。意識の底に存在するのは反抗心や恐怖、不安などごまかすことのできない正直な感情であることも特徴としてあげられる。また「日常的に感じている思い」とは、普段意識の底部分に留まっているということが考えられる。

「意識の底」「意識の表面」

- ①「意識の底」には「本音」が存在する。
- ②感情は「意識の底」に混沌とした状態で存在し、「意識の表面」に浮かび上がることで、その姿が明瞭に現れる。

## 第三項 意識に浮かぶ事象 —記憶—

意識に関する例文において、「上る」と「浮かぶ」の最も大きな違いは、「上る」という概念は「どこから」というスタートの部分が定義づけられていないが、「浮かぶ」に関しては「浮沈」との関連性が強く、「底」から浮かび上がると解釈されている例がいくつか見られることにある。また「底」から浮かぶと捉えた場合、それは空中ではなく水を連想させ、浮かび上がった最終地点は「表」となることより、ゴールも存在するということになる。よって、「上る」と「浮かぶ」の大

きな違いとは、「浮かぶ」においてはその範囲が限定されているということに見られると考える。

- ①「意識に浮かぶ」とは、事象が「表面」に表れることで明らかに映し出されることを示す。
- ②一度記憶された事柄は「意識の底」部分に貯蓄されており、「表面」に浮かんで姿を現した状態が「思い出した」状態となる。

#### 第四項 意識の中・上

「意識の中」という表現より、球体のプロトタイプにおける「意識」の外枠にあたる境界線について触れる。ここに挙げられる「中」とは、ステージのプロトタイプにおける「中」とは質が異なり、照射を必要としない。

「お前は何時もお前だ。少しも變りはせぬ。ただ、陽光と熱風とが一時的な厚い面被（ヴェイル）を一寸お前の意識の上にかぶせてあるだけだ。」

上の例の場合、意識の「上」といっても物理的に上下の関係ではなく、「意識」というものを覆って違うもののように見せかけているが本質的なものは何も変わっていないということを示している。

- ①照射、または表面に浮かび上がるなどの動きを必要としない場合、意識というものは「意識の中」と「外」との対立のみで捉えられるため、球体などの単純な枠組みで捉えられる。

これらのことから球体におけるプロトタイプとして次のような特徴が挙げられる。

##### 断面的に見た場合

「底」…「日常感じている思い」「本音」などが存在する。それが「表」に出る際には「言動」など明らかな形として表れる。

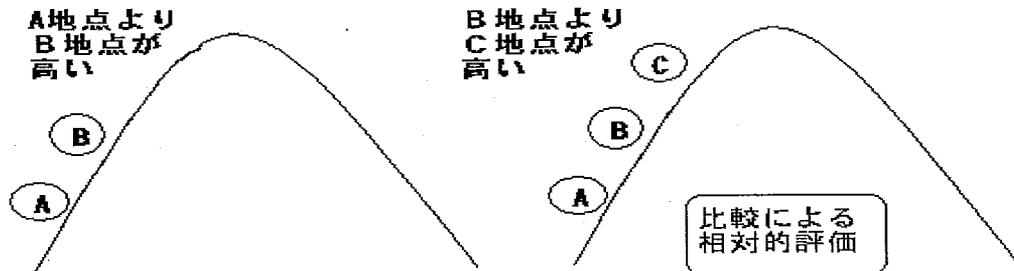
「表」…「ステージ」における照射部分に対応する箇所。水面に浮かび上がることで「事象」が明らかになる。

##### 球体として捉える場合

「中」…意識というものを「中」と「外」との対立で捉え、意識していること全般を総括的に捉える。

## 第二節 山としてのプロトタイプ

表 14 「山のプロトタイプ」



「山」のプロトタイプに関しては、比較という作業の下に「高低」が段階的、または相対的に評価されるものであるといえる。

「意識」＋「高」の対義語にあたるものであり、「意識が低い」とはつまり自覚があることにはあるが、極めて弱い状態であることを示す。これらの例について注目すべき点は、「意識」というものを縦軸で考えた時、ゼロの状態が一番下のレベルであり、意識が低いという状態は、「自覚している状態」つまり、プラス方向にあると考えられる。意識を高さのあるものとして捉え、相対的に見て「低い」か「高い」かその程度が判断されるものである。つまりその意識というものが限りなくゼロに近い状態であっても、当人は自身の立場を自覚していることが前提として、このように表現されていることになる。

### 1. 関心

「浮かぶ」動作は、「底面」から「表面」までの限られた範囲の行動に留まると考えられる。一方「高まる」という語は相対的な評価であることは前提にあるが、終点はなく無限に上方向へ上がっていくことが可能であると考えられる。

① 「高低」の価値基準は比較を下に相対的に判断される。

② 「意識が低い」という評価は、「意識が高い人間」との比較により表れるものであり、「意識がない」などのゼロ以下の評価にはならない。

「上る」「浮かぶ」などはゴール地点となる目的地を有するが、「高まる」という表現には際限がない。

### 第三章 日本語の心情表現を基礎に用いられる外来語

日本語における心情表現の空間上位置づけを踏まえた上で、日本語に受容された外来語にも同様に見られる認知の方法について述べた。

#### 第一節 「テンション」英語における用法との相違

「ハイテンション (high tension)」をそのまま英語として用いた場合、この表現がどのように解釈されるかということについて英語のネイティブスピーカーに聞き取り調査を行ったところ、「二本の支柱のうち一方にのみ圧力がかかった状態」または「肩こりのひどい状態」などを連想する。または新聞記事において「tension」または「high tension」とは主に国同士や派閥争いなどの対立による「緊迫状態」を指すが、心情を表す際に「高低」の概念を用いる事はないとの回答が見られた。

『現代用語の基礎知識』には「テンション」について次のような表現が記載されている。

テンション高い 気分がハイになっている。盛り上がっている。

テンション低い 元気がない。(気分が乗らない。)

同書では流行語、または若者言葉として扱われているが、これらの表現が2001年度以降掲載され続け、またその意味の記載が増加している点からも、日本語として広く浸透しつつあることが窺える。

このことより、「テンション」という語が日本語に取り入れられて少なくとも半世紀以上、この外来語は元の意味範疇から外れた使用法として日本語の中で新たな派生を見せているといえる。

#### 第二節 テンションと上下の関係

辻(2003)で述べられている動詞「上げる」が、一般動詞として比喩的に拡張するケースとして「会場のテンションを上げる」という例を挙げている。(p 175~176) これについてまとめると次のようになる。

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 1. 頭を上げる        | 目に見える物理的移動                                     |
| ↓               |  |
| 2. 会場のテンションを上げる | 物理的な上下方向の移動は見えないが、目に見えてわかる会場の活気より判断する「上下の価値基準」 |

まず、「頭を上げる」という表現が空間的な移動(運動)の方向を表すことは、経験上容易に理解できる。それでは、それが抽象的概念として用いられるよう

になったとされる「会場のテンションを上げる」という表現については、「上下」の基準はどこで判断されるかと

いうと、「場の雰囲気」によるものである。会場内で人々が「笑う」「発言する」「体を動かす」「拍手をする」など具体的な行動をした結果、それが「テンションが上がった」もしくは「盛り上がった」状態として認識されることになる。つまり、会場が活気づいた状態（動）は「上」方向、静まり返った状態は（静）は「下」方向という判断がなされていることになる。

表1 「会場のテンション高低・上下の位置関係」

高	↑	↑	0	↓	下	低
上						
		— 平常値 —				
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・拍手がわきおこる</li> <li>・発言</li> <li>・歌う</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・静まり返る</li> <li>・眠る</li> <li>・しらける (ただし集中してしんとすることは含まれない)</li> </ul>		

大きな声を出すことや、発言する事を「声を上げる」といい、逆に声を小さくすることを「声を落とす」というように、音に関わる慣用句には「上」方向は「大」、「下」方向は「小」という位置付けが見られる。「テンション」と「上下」の方向のつながりには、視覚または聴覚から得る情報を、空間的に位置づける流れをくんでいる様子が窺える。

### 第三節 共感覚の視点から

森田（1996）では、「情意的共感性からの連想」について次のように述べられている。

本来性格を異にする他の対象の現状に、感覚的な共通性を見だし、あくまで共感的な意識として、異なる状況描写に用いるべき形容語を応用したものだと言ってよい。いくつか例を挙げておこう。

「熱い仲」「甘い言葉」「資金繰りが忙しい」「おとなしいデザインの服」  
 「黄色い声」「冷たい性格」「話が生臭くなってきた」「神経が太い」「食が細い」

「テンション」を形容詞で捉えた例は、4「なんか急にテンション高くなったりして」の例などに見られるが、この「テンションが高い」という表現は「神経が太い」の例と共通し、心情または性質を視覚的に形容しているものである。テレビの番組上、テロップなどでよく見られる「テンション↑（テンション上がるの意）」などの、記号を使用した表記などは、正に心情を視覚的に捉えようとする動きの現れであるといえよう。

「百聞は一見にしかず」とはよく言うように、物事を視覚的に捉えるということは、必要な情報を端的にまた簡潔に捉えることを可能にする。「テンション」と「上下」の位置付けには、このような視覚効果を求める共感覚の作用が働いていると思われる。

#### 第四節 テンションの価値付け

「テンション」を意味の観点から考察すると、この語はゼロや下方向に位置するよりも、上方向にあることが好ましいとされている文例が見られる。それは次のようなものである。

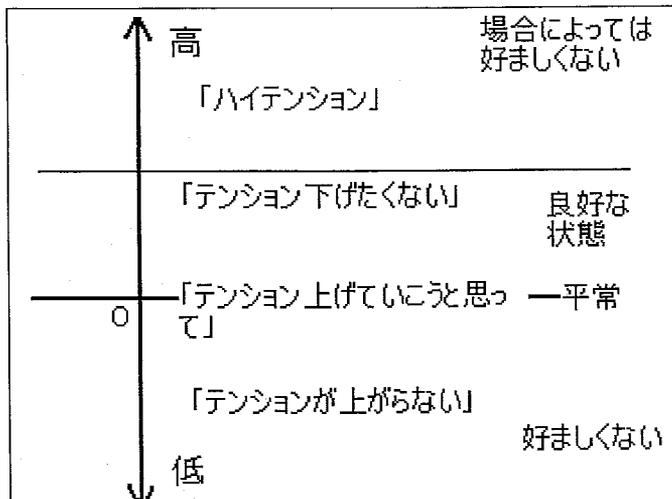
- 5 「そんなことでせっかくの誕生日をテンション下げたくない
- 6 「カメラの向こうにオカンがおると思って」「テンション下がるわホンマに」
- 7 「テンションが上がらない。怒濤の勢いでアップしてから…イマイチテンションが上がリません。」
- 8 「12月24日 テンションが上がらない ストーブのおかげで、だいぶPCがやりやすくなった。… けど、微妙に暖かいせいでテンションが上がらない…。」

上の例のように、「テンションが上がらない（それにより困っている）」という例は見られるが、「(上がった) テンションが下がらず困っている」という例は見られない。これにより、「テンション」とは、上方向は「やる気がある状態」「活気がある状態」であることを示し、下方向はその対極であると解釈される。また、「上がる」「下がる」など「上下」の移動の動きが見られることから、常に動いているものであり安定はしていない状態のものであるということを示している。「気分」という移ろいやすいものを適格に表現するため、言語上で「上下」自由に行き来できる状態であることが必要であったと思われる。

表現としては「テンションが上がっている」「テンションが高い」「ハイテンション」は同等のレベルで捉えられる。

- 9 「虻川さんはかなりハイテンションでした。」

表2 「テンション+「上下」「高低」の表現における価値付け」



しかし、「テンションが上がりきった状態」が常に好ましいとも限らず、場合によっては「テンションが高い」状態が悪い意味として取られる場面もある。

鈴木 (1973) 「形容詞の5種の基準」に見られるように、形容詞をもって人が表される場合には、例えば「パーティー会場で一人だけテンションが高い」とは1人だけ浮いた状態になっていることを示すなど、その評価は時や場面など環境に左右される。

#### まとめ

以上、日本語における「意識」そして「テンション」という心情表現が空間上どのように位置づけられ、またそれがどのような意味を示すかということについて述べてきたが、無意識のうちに用いられている「上下」「高低」の概念を図として表すことで、言語上で行われる空間認知のパターンを明らかにすることが可能となった。それらは、ステージやライトの照射、水に関連した捉え方、球体、地層、山など身近に存在するものを媒体に表現される傾向にあることから、日本という土地に住みこれらのことを生活の中で実際に経験するという共通性の元に生まれる日本語母語話者としての一種の集団語的役割を果たしているのではないかと考える。よそ物として輸入された単語をも日本語として調理しなおし、日本語として捉えやすい形へと作り直すという動きが見られ、結果、オリジナルとはまるで違う様相のものが新たに出来上がるという構図が生まれる。それが今回の研究で取り上げた「テンション」という英語の例である。今回は「意識」と「テンション」の二語に焦点を絞ったため、その他の語彙との比較ということに関しては言及するに至らなかったが、冒頭で述べたとおり、

「プライド」という語に関しても同じような特徴が見られ、プライドが高いという表現を直訳してもネイティブには伝わらないように、これは日本語母語話者が日本という環境の中で培ってきた空間認知の方法を英語における心情表現にそのまま適用した結果表れた誤用ということになる。しかし他方から見れば、それは日本語の特性を前面に出して新語を作り出した結果であるともいえる。

特にテンションに関してはこの語が「気分」の概念として表されるようになったことの事情については結論に至らなかったが、第三章で述べたとおり、「上下」「高低」の方向性において、反義語としての意味上の固定が特徴としてその挙げられる。日本語の心情表現においては、「気分が高まる」とは言っても「気分が低まる」とは言えないなど、反義語としての応用のききにくさが見受けられるが、そのような既存の日本語の欠点を補う形として「応用のききやすい」または「感情を端的に言い表せる利便性」を兼ね備えた語として、外来語が受容され日本語として新たに構築された姿がここに見られる。

また、心情に続く形容詞には「高低」「深淺」の概念と用いられる例をよく目にするが、これらの形容詞とは自分と他人との比較、または現在の自分と過去の自分との比較など、比べる基準の存在を必要とするものである。「テンション」についても同じことが言え、「テンションが高い」とは通常自分または周りの人間の態度などの比較対象が存在してこそ「高低」の位置づけができるものであるといえる。「テンション」という語が日本語に受容され半世紀以上、日本語においては「陽気」であったりともすれば「浮いた存在」とも解釈されるようになり、「テンションが高い、低い」または「テンションが上がる、下がる」などとして表現されるようになった。英語においては、比較として用いられないこれらの表現が、日本語においてこのように比較を前提に表現されるようになったことの原因の一つとして、「出る杭は打たれる」「和を大事にする」という日本人の気質の問題に関わってくるのではないかと考える。今後の課題として、英語における心情表現において「上下」「高低」などの比較を前提に用いられるものの有無を確認し、日本語における心情表現で比較というものがどのような意味を持つのかについて言及し、言語上から日本人の気質、特性を明らかにする方法を探っていきたい。

以上をもって、本論文の結びとする。

## 参考文献

1. 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界 現代言語学から視る』日本放送出版協会
2. 石田プリシラ (2003) 「慣用句の意味を分析する方法」『日本語と日本文学 (37)』 収載
3. 石田プリシラ (2004) 「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法——統語的操作を手段として」『国語学(55)4 (通号 219)』 収載
4. 氏家洋子 (2005) 「異文化で作られた概念の受容——外来語の現在 (特集 日本語に入ったことば、日本語から出たことば)」『国文学解釈と鑑賞 (70) 1』 収載
5. 岡本佐智子 (2004) 「外来語の受容と管理：言語政策の視点から」『北海道文教大学論集(5)』 収載
6. 佐々木英昭 (2000) 『漱石文学全注釈 8』若草書房
7. 陣内正敬 (2003) 「外来語の課題と将来像 (特集 いまカタカナことばを考える)」『日本語学 22(8)(通号 267)』 収載
8. 鈴木孝夫 (1973) 『ことばの文化』岩波新書
9. 染谷聡 (2003) 「複合的比喩の認知的基盤」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊(10-2)』 収載
10. 高橋圭介 (2004) 「動詞「認める」の多義構造」『言葉と文化(5)』 収載
11. 辻幸夫編 (2003) 『シリーズ認知言語学入門 (第1巻) 認知言語学への招待』大修館書店収載 本多啓著
12. 辻幸夫編 (2003) 『シリーズ認知言語学入門 (第1巻) 認知言語学への招待』大修館書店収載 菅井三実著
13. 夏目漱石(1936) 『文学論』『漱石全集第十一巻』精興社収載
14. 日野資成 (2003) 「慣用表現における意味変化のプロセス 換喩と比喩 (特集 国語学・国語教育)」『解釈 49(5・6)』 収載
15. 水谷修 (2003) 「【巻頭エッセイ】日本語の国際化と外来語 (特集 いまカタカナことばを考える)」『日本語学 22(8)(通号 267)』 収載

16. マーチン・ハウダ (2005) 「外来語問題の原理的考察——日本語とポーランド語の例から (特集 日本語に入ったことば、日本語から出たことば)」『国文学解釈と鑑賞 70(1)』 収載
17. 宮武利江 (2003) 「比喻と感情表現 (特集 感情を表す言葉)」『日本語学 22(1)(通号 260)』 収載
18. 初山洋介 (2002) 「「換喩 (メトニミー)」をめぐって——認知言語学からのアプローチ (比喻分析の新展開)」『表現研究(76)』 収載
19. 初山洋介 (2003) 書評論文 伊藤たかね編「文法理論: レキシコンと統語」『日本語文法 3(2)(通号 5)』 収載
20. 初山洋介 (2003) 「認知言語学における語の意味の考え方 (特集 形式文法と機能文法)」『日本語学 22(10)(通号 269)』 収載
21. 森田良行 (1996) 『意味分析の方法—理論と実践—』 ひつじ書房
22. 湯本昭南 (2005) 「借用—漢語、外来語 (特集 日本語に入ったことば、日本語から出たことば)」『国文学解釈と鑑賞 70(1)』 収載
23. 重松泰雄 (1972) 『日本近代文学大系 26 夏目漱石集Ⅲ』 角川書店

【辞書・辞典】

24. 『日本国語大辞典 第二版 第一巻』 (2000) 日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部編 小学館
25. 『日本国語大辞典 第二版 第三巻』 (2001) 日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部編 小学館
26. 『分類語彙表 増補改訂版』 (2004) 国立国語研究所編 大日本図書
27. 『広辞苑』 CASIO 電子辞書 EX-word
28. 『ロングマン現代アメリカ英語辞典』 CASIO 電子辞書 EX-word
29. 『情報・知識 imidas』 (2000~2005) 集英社

30. 『現代用語の基礎知識』(2000～2005) 自由国民社

31. 『知恵蔵 朝日新聞現代用語』(2000～2005) 朝日新聞社

#### 用例採取文献

1. 荒川惣兵衛 (1967) 『外来語辞典』 角川書店

[以下より検索した用例の詳細については資料編に記載する。]

2. 『青空文庫』 <http://www.aozora.gr.jp/>

3. 『Project Gutenberg』 <http://www.gutenberg.org/>

# 資料編

「意識」用例（全83例）青空文庫収載

用例番号	作者名	作品名	用例
1	堀辰雄	幼年時代	私の意識上の人生は、突然父があらわれて…新しい家のなかでようやく始まっている。
2	折口信夫	信太妻の話	意識上の事実もあらうが、多くは無意識的に、色々な記憶…を持ち出して居るのである。
3	寺田寅彦	丸善と三越	いろいろな印象や…さまざまな刺激が…色々の変わった形や響きになって意識の上に浮かび上がってくる。
4	宮本百合子	毛の指環	由子の意識の上に暫く紫の前掛が鄙びた形でひらひらした。段々その幻影がぼやけ、紐だけはっきり由子の心に遺った。
5	斎藤茂吉	念珠集	スペクトラを退治した写像なども無論意識のうへにのぼつて来なかつたのである。
6	宮本百合子	アメリカ文化の問題	「意識の上では自分の独立判断でやっていると思うが、その基礎になっている新聞とかラジオとかをみると
7	宮本百合子	落ちたままのネジ	自身の敗北の十分な意識の上に立って、その社会的・歴史的要因を作品の中でつきつめようとする熱意を欠いている
8	森鷗外	妄想	自分の意識上の事実である。自分は此の儘で人生の下り坂を下つて行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知つて居る
9	レオ・トルストイ	パアテル・セルギウス	何物をも聞くまいとする。又意識の上でも、いつも自分が聞き馴れた祈祷の詞を聞いたり、又繰り返して唱へたりする時、…何物をも感じまいとしてゐる。
10	夏目漱石	現代日本の開化	そうするとその個人でない集合体のあなた方の意識の上には今私の講演の内容が明かに入る。
11	中島敦	環礁—ミクロネシア巡島記抄—	お前は何時もお前だ。少しも變りはせぬ。ただ、陽光と熱風とが一時的な厚い面被（ヴェイル）を一寸お前の意識の上にかぶせてゐるだけだ。
12	葉山嘉樹	海に生くる人々	彼らは自分が寝るも起きるも賃銀労働者であることは知っていた。けれども、それを絶えず意識の中にしっかり握り詰めているわけには行かなかつた。

13	南部修太郎	病院の窓	死ぬ病人——さうした暗い意識の中に、陰気なさつきの女の顔が何時となく重なって行くのだった。
14	中井正一	図書館に生きる道	言語ができ、文字ができ、機構ができあがってくることは、この宇宙のもつ秩序と法則を、意識の中に再確認し、その驚きを沈め、この法則の中に、生活そのものを溶かし込むことである。
15	佐左木俊郎	汽笛	彼の意識の中に築きかけられた美しいものが、吉川機関手の一言で崩されてしまったのだった
16	宮本百合子	獄中への手紙 一九四〇年	小説ばかりかく決心をしたのは、健全にしかしその意識の栓をぬいて溢れさすためです。フロイドは意識の中のそういうものを性的なモメントでばかり見ましたが…
17	大杉栄	自叙伝	母が死んだ、というようなこともほとんど忘れたようにはしていたが、次意識の中ではよほどさびしかったに違いない
18	黒島傳治	穴	人間は罪を犯そうという意志がなくても、知らぬ間に、自分の意識外に於て、罪を犯していることがある
19	宮本百合子	透き徹る秋	そのため翻って、どんなに製作に向つての無私が必要だか、意識下の均衡が大切だか思い知らされているといえるのである。
20	岡本かの子	川	かの女も画家も、意識下に直助によつて動揺させられるものがあり、二人ともめい／＼勝手にあらぬことを云つてるやうで
21	宮本百合子	ジイドとそのソヴェト旅行記	それは如何なる意識下の力—作家ジイドが好んで潜入し、格闘するところの無意識の力に作用されてであるのか。
22	宮本百合子	バルザックに対する評価	藝術創作の過程における意識下的なものの力を過大視する評価のしかたに賛成を表さぬシルレルの態度は十分うなずけるが
23	辻 潤	浮浪漫語	少なくともそういう意識の下で自分は物を書くのである。だから、書いたり饒舌ったりした後ではキット余計な無駄なことをしたように
24	宮本百合子	青春	この弟は、…脳症になって命をおとした。あのとき泣かない自分の心の必然というものが、意識の下まで自分ではさぐり入れられていなかったと思う。

25	木下杢太郎	少年の死	或ものは意識閥（みき）下に壓（お）しつけられて、ただ不安な心持だけになってゐる。
26	堀辰雄	菜穂子	それに近い感情はこの頃いつも彼女が意識の閥の下に漠然と感じつづけていたものだったが
27	寺田寅彦	映画芸術	このように映画の画面の連結と連句の句間の連結とは意識の水準面の下で行われるときにはじめて力学的な意味をもつので
28	夏目漱石	それから	実は平岡が東京へ着いた時から、いつか此問題に出逢ふ事だらうと思つて、半意識の下で覚悟
29	夏目漱石	吾輩は猫である	ゼームスなどに云わせると副意識下の幽冥界と僕が存在している現実界が一種の因果法によって互に感応したんだろう
30	寺田寅彦	明治三十二年頃	こうした種類の挿画や裏絵は執筆画家の日常の職業意識の下に製作されたものであらうと思うが
31	夏目漱石	坑夫	またこの思想や感情が外界の因縁（いんねん）で意識の表面へ出てくる機会がないと、生涯その思想…
32	二葉亭四迷	平凡	人間の意識の表面に浮だ別天地の精神界と違って、此精神界は着実で、有力で、我吾々の生存に大関係が…
33	伊藤野枝	「別居」について	「どうにかしなければならぬ」という欲求はしばらくの間も私を離れたことはありませんが…けれどもなかなか明瞭にそのことが意識の表面には浮かび出ませんでした。
34	芥川龍之介	毛利先生	自分は鏡の中のこの光景を、しばらく眺めている間に、毛利先生に対する温情が意識の表面へ浮かんで来た。
35	寺田寅彦	科学と文学	ある瞬間までに読んで来たものの積分的効果が読者の頭の中に作用して、その結果として読者の意識の底におぼろげに動き…
36	水野仙子	輝ける朝	どうやら深い眠に落ちかけた時でも、轟ろ地を這ふ汽車の響が耳に入ると、おぼろな意識の底からある懸念が頭を擡げた。
37	宮本百合子	思い出すか ずかず	兎に角、平常、自分の小学校時代、誠之、というものは、密接な割に意識の底に沈められて来たのである

38	宮本百合子	女性の歴史 —文学にそっ て—	当時の婦人はどんなに自分達の希望を殺して生きていたか、また殺させているという暗黙の恐怖が男たちの意識の底を流れていたかが解る。
39	林不忘	あの顔	39 こどものころにどこかであの絵を見たことがあって、その時の恐ろしい印象が、記憶の下積みになって意識の底に潜在している
40	宮本百合子	ソヴェトの 芝居	それは、ソヴェト芸術のもっている明瞭な階級性を、観る者が理解しない場合か、意識の底でそれに反抗している場合にだ。
41	寺田寅彦	読書の今昔	それをわれわれの意識の表層だけに組み立てた浅はかな理論や、人の入れ知恵にこだわって無理に押えつけ
42	寺田寅彦	天災と国防	言わば取り止めのない悪夢のような不安の陰影が国民全体の意識の底層に揺曳していることは事実である
43	寺田寅彦	三斜晶系	その時自分の意識の底層に郷里の高知の町の映像が働きかけたが、それっきり表層までは現れないで消えていた。
44	寺田寅彦	病室の花	人間でも意識の奥に隠れた自己といったようなものが、その人がらの美しさを決定する要素ではあるまいか。
45	宮本百合子	美しき月夜	いかほどの高处に彼女が在ろうとも、彼だけは的確に到達することができるので…彼の意識の奥に横たわるこの自信も強度を増して来る。
46	島木健作	癩	どんなみじめな思いに心が打ち摧かれるであろうか、ということが意識の奥ふかくかすかに予想はされるのではあったが。
47	寺田寅彦	球根	彼の意識の水平線のすぐ下に浮いたり沈んだりしていたこの花の名が急にはっきり浮かび上がって来た。
48	有島武郎	生まれ出ず る悩み	君はだんだん私の意識の闕（しきい）を踏み越えて、潜在意識の奥底に隠れてしまおうとしていたのだ。
49	夏目漱石	木下杢太郎 著『唐草表 紙』序	そうしてその過去が過去となりつつも、猶（なお）意識の端に幽霊のような朧気（おぼろげ）な姿となって佇立（たたず）んでいて、
50	宮本百合子	禰宜様宮田	これも釣をしているらしい小さな人影を見てもなく見守りながら、意識の端々が…
51	芥川龍之介	或阿呆の一 生	意識外の彼自身は、——言はば第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちを或短編の中に盛りこんでみた。

52	宮本百合子	南路	静穏に、淀みのない彼の書翰は、ここまで来ると、見えない曇りを帯び、無理に、何ものかを意識の外に押しやったような形跡が…
53	田中貢太郎	墓の血	このあたりの別荘へ来ている者だろうと思ったきりで、それ以上べつに好奇心も起らないので、女のことは意識の外に逸してその土手を上流の方へ歩いて往った。
54	宮本百合子	その柵は必要か	しかし座談会の話をもても、意識的な労働者が自身に必要と感じているのは、労働者階級としての意識のたかまりであり、
55	宮本百合子	婦人作家	労働階級者の意識のたかまりと組織の成立とともにプロレタリア文学運動が進出するにつれて、
56	楠山正雄訳	星の銀貨 (ドイツ語か) らの翻訳) 翻訳者紹介文より	「模範家庭文庫」の担当となる。親交のあった岡本帰一にヴィジュアル面を託し、他人の原稿を編集するうち、児童文芸への意識が高まっていく。
57	宮本百合子	ソヴィエト文壇の現状	五カ年計画の実践をとおして、階級意識を一層たかめられたソヴィエトの勤労人民は、マヤコフスキー派の、言葉の英雄主義では満足しなくなった。
58	菊地寛	無名作家の日記	あいつは自分の華々しい成功に浸りながら、その意識をもっと高調させるために、俺を傷つけてみたくなったのだ。
59	小林多喜二	党生活者	だからサクラになるものは、意識の低い、普通の女工が知らずに抱いているような考えや偏見などをハッキリ知っていなければならなかった。
60	宮本百合子	ソヴェト同盟の芝居・キネマ・ラジオ	これは文化の生産者の方から見たことだが、もっと意識の低い大衆殊に、農村の婦人大衆に向かってソヴィエト映画が文化啓蒙の役割を
61	宮本百合子	なぜソヴェト同盟に失業がないか?	世界じゅうのどんな意識の低いプロレタリアートでも、彼がプロレタリアートならやきつくように知っている。
62	宮本百合子	ズラかった信吉	現在の肉類の欠乏は、五カ年計画のはじめ、集団農場化が行われるとき、階級的意識の低い中農や反革命的な富農が、家畜の共有を嫌がって非常に多くの牛、馬、豚を屠殺した

63	与謝野晶子	母性偏重を排す	私の意識にはこの疑問がまず浮ぶ。そうしてトルストイ翁のこれに対する答えは「人類の本務は二つに分れる。即ち一は人類の幸福の増加、他は種族の存続。・・・
64	原民喜	災厄の日	前から二三度僕の意識に浮かんだことのある土地会社の方へ足は向いてゐた。袋路を入つて、その扉の前に僕は立つた。
65	宮本百合子	文字のある紙片	と云う自暴的な荒々しい囁きが、私自身の意識にせき上げて来る。私は一層彼女に穏やかに、親切に物を云う。
66	大杉栄	生の拡充	自己意識のなかつた原始の自由時代に、さらに十分なる自己意識を掲げて帰ることを知らなかつた。
67	梶井基次郎	川端康成第四短編集「心中」を主題とするヴァリエーション	夫の今にも破れそ（ママ）うな心臓——それを預かつているといふ意識の如何に重いこと。夫はもう死んでゐるかも知れない。そんなことも彼女は思つた。
68	太宰治	ろまん燈籠	いつも病気をして、母にお手数をかけているという意識が胸の奥に、しみ込んでいるせいでもあろう。
69	夏目漱石	艇長の遺書と中佐の詩	平安な時あらゆる人に絶えず付け纏はる自己広告の銜気は殆ど意識の上に上る権威を失つてゐる。
70	河上肇	御萩と七草粥	物質的には辛うじて米塩に事欠かぬ程度の貧乏人であるから、他人から、粗末に扱われた場合、今まで気にも留めなかつた些事が、一々意識に上るであろう。
71	芥川龍之介	手巾	かう云ふ先生にとつて、奥さんと岐阜提灯と、その提灯によつて代表される日本文明とが、或調和を保つて、意識に上るのは…
72	コロレンコ 森林太郎訳	樺太脱獄記	この心持が意識に上るのを、強いて自ら押へてゐる。これがかういふ流浪人の心の底に持つてゐる或る物である。
73	芥川龍之介	春	もつともこれは東京駅へ出迎えた妹を見た時から、時々意識に上ることだった。
74	森鷗外	阿部一族	そのとき長十郎の心のうちには、非常な難所を通つて往き着かなくてはならぬ所へ往き着いたような、力の緩みと心の落ち着きとが満ちあふれて、その他のことは何も意識に上らず、備後豊の上に涙のこぼれるのも知らなかつた。

75	中里介山	大菩薩峠 年魚市の巻	それにつけても、一人というものの存在が、その時には意識に上らなかつたほどの影が、立ち退いてみると、無用の用の大きさの予想外なのに驚かされることがある。
76	岡本かの子	雛妓	おやじ自身はそれをはっきり意識に上す力はなかつたかも知れない。けれど晩年にはやはりそれに促されて、何となく…
77	有島武郎	星座	今日の演説を座興も座興、一人の女を意識に上せて座興にしようとしている人見の軽薄さにはまったく腹が立った。
78	宮本百合子	一本の花	彼女は、幸子がそこにいるのを知りながら忘れていた瞬間の長さ、深さが、幸子に声をかけられ初めて朝子の意識にのぼった…
79	宮本百合子	黄銅時代の 為	故に、その純粋な場合には必ず其等の一面も影となって人の意識にのぼって来る。
80	紫式部 与 謝野晶子訳	源氏物語手 習	ただ自分は入水する決心をして身を投げに行つたといふことが意識に上つて来た。
81	島崎藤村	新生	壊れ行く自己（おのれ）に対するような冷たく痛ましい心持が、そのうちに岸本の意識に上つて来た。
82	森鷗外	津下四郎左 衛門	従来回抱してゐた雪冤の積極手段が、全く面目を改めて意識に上つて来た。
83	ゲオルヒ・ヒ ルシュフェ ルド 森林太郎訳	防火栓	此場の危険は次第にはつきり意識に上つて来た。

「自覚」用例（全2例）青空文庫収載

①	与謝野晶子	婦人指導 者への抗 議	今後の生活が個人各自の自覚の上に立つ生活であらねばならぬというのは、この点に自覚することをいうのだと思います。
②	宮本百合子	よもの眺 め	そして悲しがなし近代的個性の自覚の上によるめき立っていた文学は、最近三年間に、殆ど文化として抵抗らしい抵抗さえも示さずに崩れ終つた。

「テンション」用例

	ジャンル	用例 (状況説明文)
1	ワイドショー (2005/5/15)	(夜中に公園内を車で暴走する若者に、「騒音についてどう思うか」というインタビューに対する回答) 「ええんちやう?テンション上がるし」
2	「あいのり」ウェブ上 日記	(「ミカリン」の日記より 「おーせ」への手紙※「」内ニックネーム) 「エジプトで合流する時にピンクのワゴンの窓からズラが見えた瞬間、一気にテンション上がりました！」
3	日常会話 20代女性 (2005/5/18)	「あたし部屋から変えていこうと思って。ピンクにする。テンション上げていこうと思って。」
4	TV番組内発言 (2005/5/14)	(藤井隆の婚約について本人に対する、テレビ番組ゲストコメンテーターの発言) 「なんか急にテンション高くなったりして」
5	TV番組 「マルバレ」 小沢真珠コメント (2005/5/18)	(心理テスト：誕生日に自分がプレゼントしたものを相手が次のデートの時身につけておらず、代わりに他の物をつけていた時、その理由を聞くかどうか。という質問に対する回答) 「(好みが違うことをわざわざ聞いて) そんなことでせっかくの誕生日をテンション下げたくない」
6	TV番組 「笑いの金メダル」芸人ネタ (2005/5/13)	「カメラの向こうにオカンがおると思って」 「テンション下がるわホンマに」
7	ブログ (2005/5/21)	テンションが上がらない。怒濤の勢いでアップしてから...イマイチテンションが上がりません。誰かー...上げて。(でたよ、他力本願。) <a href="http://mimasaka-01.b.to/diary/42-2k-2005年5月21日">http://mimasaka-01.b.to/diary/42-2k-2005年5月21日</a> [mimasaka-01.b.toから検索]
8	ブログ (2005/3/20)	12月24日 テンションが上がらない ストープのおかげで、だいぶPCがやりやすくなった。... けど、微妙に暖かいせいでテンションが上がらない...。なんか変な感じで、何もする気が起きない... <a href="http://zigzag.seesaa.net/article/1382248.html">http://zigzag.seesaa.net/article/1382248.html</a> - 12k - 2005年3月20日 [zigzag.seesaa.netから検索]
9	TV番組「堂本剛」 (2005/5/10)	(芸能人同士がゲームをする) 虻川さんはかなりハイテンションでした。(テロップ上)

10	TV番組 「どっちの料理ショー」 三宅裕司発言 (2005/12/15)	(ゲストの芸人に向かったの発言) 「(番組終了まで) そのテンション維持してね」
----	---	---

「Tension」用例 英語版 ※小説は Project Gutenberg (英語版の無料文庫閲覧サイト) より検索

ニュース	<p>(This is about the budget for the European Union..."tension mounting"</p> <p>means that the worries over the budget are getting bigger and bigger.</p> <p>and it would mean that people were worried and fighting over the budget.)</p> <p>" <b>Tension mounting</b> in EU budget talks" (新聞見出し)</p> <p><a href="http://www.iht.com/articles/2005/12/16/europe/web.1216summit.php">http://www.iht.com/articles/2005/12/16/europe/web.1216summit.php</a></p>
ニュース	<p>( many groups in Nigeria have bad relationships with each other, )</p> <p>" <b>Tension is high</b> in the state capital, Yenagoa, with rival groups marching in favour of and against the governor."</p> <p><a href="http://news.bbc.co.uk/1/hi/world/africa/4478646.stm">http://news.bbc.co.uk/1/hi/world/africa/4478646.stm</a></p>
ニュース	<p>(This tension is like the one above. "racial tension" means the bad relationship between the groups of people (here, the Lebanese and Australians in Australia).</p> <p>"Diverse groups try to tame further <b>racial tension</b> on Australia's beaches"</p> <p><a href="http://seattletimes.nwsourc.com/html/nationworld/2002684606_aussie15.html">http://seattletimes.nwsourc.com/html/nationworld/2002684606_aussie15.html</a></p>
小説 Wuthering Heights by Emily Bronte	<p>"Mr. Heathcliff paused and wiped his forehead; his hair clung to it, wet with perspiration; his eyes were fixed on the red embers of the fire, the brows not contracted, but raised next the temples; diminishing the grim aspect of his countenance, but imparting a peculiar look of trouble, and a painful appearance of <b>mental tension</b> towards one absorbing subject."</p>

小 說 The Adventures of Sherlock Holmes by Sir Arthur Conan Doyle	"The little man stood glancing from one to the other of us with half-frightened, half-hopeful eyes, as one who is not sure whether he is on the verge of a windfall or of a catastrophe. Then he stepped into the cab, and in half an hour we were back in the sitting-room at Baker Street. Nothing had been said during our drive, but the high, thin breathing of our new companion, and the claspings and unclaspings of his hands, spoke of the nervous <u>tension</u> within him."
---	--